二二二六

文學士和田萬吉
永井一孝 編纂

國文學小史

教育書房發行

凡例

一本書は尋常師範學校・中學校の教科書として著述せるものなり。故に、又高等女學校の如き中學教育を施せる諸學校の教科書と爲すを得べし。

一本書に用ゐたる文學上の名稱は、大方世間に慣用せらるゝものを採れり。

一本書は時代の區分に從ひて編を分ち、毎編には必ず總論ありて各時代の文學上の大勢を叙説せるのみならず、歌謳及び散文の條下にも亦それ〴〵の總説ありて其の大要を略述せり。故に、授業上の都合によりては、先づ一部を通じて此等の總論及び總説を課し、次いで各編の細説に及ぶことを得る便あり。

一本書に掲げたる實例は專ら參考のために引用したるも

のあり。授業時間の少き場合には、教師の見込によりて多少の省略を施すも妨げ無し。

一實例は專ら原本に從へりといへども、讀者の便利を慮り、著者の見によりて適宜に句讀點を施せり。

一祝詞・宣命・萬葉・古事記・風土記等は、其の書き方を示さむが爲に孰れも原本のまゝを掲げ、別に假名書きを對照して讀解に便じたり。

明治三十二年十二月

著者識

目次

緒論……一
第壹編　奈良時代以前の文學
第壹章　總論……六
第貳章　歌謠……八
第參章　散文……一四
第貳編　奈良時代の文學
第壹章　總論……二二
第貳章　歌謠
第壹節　總說……二六
第貳節　『萬葉集』……二七
第參章　散文
第壹節　總說……五七
第貳節　宣命……五八

第參節 『古事記』……六三
第四節 風土記附氏文……六九

第參編 平安時代の文學

第壹章 總論……七五
第貳章 歌謠
第壹節 總說……七九
第貳節 『古今和歌集』……八四
第參節 『古今集』以後の勅撰歌集……九一
第參章 散文
第壹節 總說……一〇〇
第貳節 物語……一〇三
第參節 歌序……一一九
第四節 日記及び紀行……一二二
第五節 草子……一二九
第六節 雜史……一三五

第四編 鎌倉時代の文學

第壹章 總論……一四九
第貳章 歌謠
第壹節 總說……一五三
第貳節 勅撰歌集……一五六
第參章 散文
第壹節 總說……一六八
第貳節 物語……一七〇
第參節 隨筆……一七七
第四節 戰記文附雜史……一八一
第五節 日記及び紀行……一九五

第五編 室町時代の文學

第壹章 總論……二〇三
第貳章 歌謠
第壹節 總說……二〇六

第貳節　和歌……二〇八
第參節　連歌附俳諧……二一五
第四節　謠曲附狂言……二二一
第參章　散文
第壹節　總說……二三二
第貳節　隨筆……二三三
第參節　雜史附戰記文……二三七
第四節　御伽草子……二四九
第六編　江戸時代の文學
第壹章　總論……二五三
第貳章　歌謳
第壹節　總說……二五七
第貳節　和歌附狂歌……二五八
第參節　俳句附狂句……二八一
第四節　淨瑠璃附脚本……二九〇

目次 終

第參章　散文
第壹節　總說……二九九
第貳節　和漢混和文……三〇一
第參節　雅文附古書の解釋及び語法の研究……三一〇
第四節　小說……三四五
第五節　俳文及び狂文……三六六

國文學小史

和田萬吉
永井一孝　合著

緒論

文學は、美的好尚に基き、言語によりて人間の感情・想像等を紋ぶるものにして、文學史は其の起原・發達及び變遷を秩序的に記載するものなり。蓋し、人の思想・意匠が、其の最も善美なる形躰に於てあらはさるゝは、主として文學にあるが故に、此の物は最も善く人情・風俗を顯表し、時世・社會を反映す。されば、文學史は一般歴史、殊に開化史の重要なる一部として見るべきのみならず、飜りては亦諸種の歴史を解明するものたり。

文學史に二種あり。世界文學史と各國文學史と是れなり。世界文學史は、世界各國の文學を綜合して、其の起源・發達等を敍述するものにして、各國文學史は、一國内にあらはれたる文學上の現象を稽査して、其の由來・顚末を講明するものなり。本書の如きは即ち後者に屬せり。

夫れ一國の文學は、其の特色を人種・言語の特性に發し、其の進化・發展を社會・制度幷に外國思想等の感化に受くるものとす。我が國の文學も亦よく是等の事情によりて特殊のものとなれり。抑、萬世一系の皇統を戴き、敬神忠君の念に富める我が日本國民の文學が、天地山川の美に養はれ、時世の隆替に動かされ、儒佛二敎の影響を受けて、絶えず變遷し來れる形跡を討尋するは、亦我が一般歷史を講究する者の任務なり。

文學の種類を大別して、歌謠及び散文の二種とす。歌謠とは、一定の規律もて言語を配列する文學を云ふ。我が國の長短歌・連歌・俳句の如き、即ち是れなり。散文とは、言語の配列に特別の規律なき文學を云ふ。我が國の物語・戰記文の如き、即ち是れなり。我が國に於いては、此の二種のもの幷に發達して、二千餘年の久しき殆ど中絶せし事なし。

こゝに我が國文學の歷史を述ぶるに當りて、時代上の區劃をなすこと次の如し。

第壹編　奈良時代以前

神代より始まりて、崇峻天皇の御代を終ふる頃に至る。此の時代の文學として今に傳はるは、和歌及び祝詞の類なり。二者共に外國思想の影響を受けず、文質共に素樸にして、尙ほ幼稚の境に在るものとす。

第貳編　奈良時代

推古天皇御即位の頃より、桓武天

皇の御宇平安奠都の頃までをいふ。漢學・佛教の影響既に見え、和歌極盛の時なり。散文には、宣命及び紀事の文あり。

第參編　平安時代　桓武天皇平安奠都の頃より、後鳥羽天皇の御宇源頼朝覇府を鎌倉に開きし頃までをいふ。名媛才女頻りに出でゝ、世は正に散文隆盛の時期なり。和歌また見るべきもの多し。

第四編　鎌倉時代　源頼朝覇府を鎌倉に開きし頃より、後醍醐天皇の建武中興に至るまでをいふ。佛教の影響漸く著く、和歌・散文共に厭世的趣味を帶び、漢學の影響また少からずして、文體の變革明かに見るべし。戰記文・隨筆の類出でたり。

第五編　室町時代　後醍醐天皇建武中興の頃より、後陽成天皇の御時徳川家康大將軍となりし頃までをいふ。此の時代の文學は、大方僧侶の手に成りたれば、佛教思想を含むこと極めて多し。謠曲・連歌の類大に行はる。平民文學の萌芽は此に兆せり。

第六編　江戸時代　家康將軍となりし頃より、孝明天皇の御代前將軍徳川慶喜公大權を奉還して王政復古する時に終る。國學・漢學共に古學の註釋をなすもの多く、儒教主義榮えたり。各種の文學一時に發し、且つ社會上各種の階級擧つて文學を有せり。殊に平民の手に移りしもの、最も隆昌を極めしは、國文學史上空前の事とす。

第壹編　奈良時代以前の文學

第壹章　總論

爰に奈良時代以前とは、神代より始まりて崇峻天皇の御代の終りの頃までを云ふ。

神代より人皇の世にかけて、國初草昧の頃は、諸般の制度未だ緒に就かず、開化の中心たるべき皇都さへ歷朝東西に移り南北に變じて定まらざりし程なれば、未だ我が國をして大文學を有せしむるに至らざりしこと勿論なり。實に、當時は只語部と稱する一部族が、わづかに口授によりて舊事古說を相傳するのみにて、洽通の文字といふものもあらざりき。世に、或は神代文字といふものありて、社會の一部に行はれたりと傳ふるものあれど、該文字を以て記載せる文學は

一も後世に傳はらざるのみならず、其の存在すらも疑はしきものに屬せり。されば、我が國に一般流通の文字ありしは、應神天皇の御代に朝鮮の使者阿直岐及び博士王仁の來たりて、皇子稚郎子に經書を授けたる時を始とすべし。此の以前にも、私に漢文字を傳へたるものあるべしと雖も、未だ弘く流布するには至らざりしなり。其の後、阿直岐・王仁等の子孫次第に繁衍し、文筆の業を以て朝庭に事へしかば、漢文字は漢學思想と共に愈諸國に傳播し、遂に其の文字を假りて國語を寫すものあるに至れり。我が國に純然たる文學あるは、此の頃を以て始とす。繼體天皇の御代に、佛教亦三韓を經て我が國に入りぬ。かくて、漢學・佛教の攻究は年を追うて盛大に赴きたり。[illegible]

然れども、此の時代の文學には、未だ漢學及び佛教の思想の

現れたるものなく、言語も亦全く我が國固有のものなり。當代の文學として今日に傳はるは、只『古事記』と『日本書記』とに散見せる歌謠、及び『日本書記』『延喜式』等に載せられたる祝詞・壽詞の類のみ。是等は孰れも散漫なる感想を發露するに過ぎずと雖も、記誦に便ぜむがために枕辭を冠らせ、對句・疊語を設けたるなど、素樸なる文辭も稍趣味の掬すべきものあるを覺ゆ。國文學の變遷を知らむとするもの、先づ此の起端を輕々に看過すべからず。

第貳章　歌謠

我が國の文學は實に歌謠を以て其の緒を開きたり。須佐之男命が出雲の國簸の川上なる須賀の地を卜して、其の妃櫛

名田姫のために宮室を營み給ひける時、雲の立騰りたるを見給ひて、

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都　ヤクモタツ　イヅモヤヘガキツ
麻菲微爾　夜幣賀岐都久流　曾能　マゴミニ　ヤヘガキツクル　ソノ
夜幣賀岐袁　ヤヘガキヲ

と詠み給へる歌、即ち是れなり。これを吟詠の首として、其の後大國主命・沼河姫・須勢理姫等各多少の歌作あり。中にも彼の下照姫の歌は『古今集』の序によりて殊に人口に膾炙せり。曰はく、

阿米那流夜　淤登多那婆多能　宇　アメナルヤ　オトタナバタノ　ウ
那賀世流　多麻能美須麻流　美須　ナガセル　タマノミスマル　ミス
麻流邇　阿那陀麻波夜　美多邇　マルニ　アナタマハヤ　ミタニ
布多和多良須　阿治志貴　多迦比　フタワタラス　アヂシキ　タカヒ
古泥能　迦微曾也　コヂノ　カミゾヤ

人皇の世となりては、神武天皇並に皇后媛蹈鞴五十鈴姫をはじめ、歴代の天皇・皇后及び群臣等歌を作るもの甚だ多し。就中、神武・景行・應神・仁德・允恭・雄畧の諸帝、さては菟道稚郎子・磐之姫・衣通姫・影媛・勾大兄皇子・平群鮪等秀詠あり。其の外、童謠・俚歌の誦すべきものも亦少からず。蓋し、上古は、後世の如く題を設け思を構へて歌を作りたるにあらず、物にふれて起れる實感を發表したるに過ぎざれば、微賤の者又童女さへ歌を詠ぜるがありしなり。されば、當時の歌は、大抵漠然たる想像と單純なる情感とを反覆せる言詞の中に據べたるまでにて、其の情感は範圍亦極めて狹く、大方男女相思の情を發表するに止まりぬ。さる程に、景行天皇の御代に連歌といふもの始めて見え、應神天皇の朝に旋頭歌と名づくるもの出で來れり。武烈天皇の朝には、男女相集りて歌を詠みか

はし、以て戀愛の意を寄する風を爲すつ。之を歌垣といふ。武烈天皇いまだ太子たりし時、歌垣の場に立ちて平群賄と影媛を爭ひ給ひしは、世に名高き事蹟なり。推古天皇の頃より、漢學及び佛敎の影響著く人心を支配し、大に我が國の文運を誘導するや、歌謠の發達次第に明かに、奈良時代に入るに及びて遂に絶代の隆盛を極むることゝなれり。

此の時代の歌體は、大方五音・七音の句數箇を聯ねて、後に七音の句一箇を添へたるものなるが、尙ほ一定の形式あるとなく、往々三音・四音・六・八・九音を一句とせるもありき。五音・七音の句各二箇の後に七音の句一箇を添へたるを短歌と呼び、五音・七音の句數箇の後に七音の句一箇を添へたるを長歌といふ。別に、連歌といふは、通常の短歌を上下の二節に分ちて、二人にて各一節を作り、さながら一首の姿をなせる歌

の謂にして、旋頭歌とは五・七・七音の三句を再返して通計六句より成れる歌をいふ。歌語は當時の通用語の中にて雅なるを擇び、只詞を疊ね句を對にし、枕辭を用ゐて諷詠に適せしめたるのみ。故に、此の時代の歌は、言意兩ながら素樸質直にして、修飾の巧緻なるものなし。

神武天皇長髓彦を討たむとして大和に入り、孔舍衛坂の戰に皇兄五瀬命流矢に當りて薨じ給ひしを想出で憤慨の情に堪へずして詠みたまへる歌　長歌

美都美都斯　久米能古良賀　阿波　ミツミツシ　クメノコラガ　アハ
布爾波　賀美良比登母登　曾泥賀　フニハ　カミラヒトモト　ソネガ
母登　曾泥米都那藝豆　宇知豆志　モト　ソネメツナギテ　ウチラシ
夜麻牟　ヤマム

美都美都斯　久米能古良賀　加岐　ミツミツシ　クメノコラガ　カキ
母登爾　宇惠志波士加美　久知比　モトニ　ウエシハジカミ　クチヒ

比久　和禮波和須禮士　宇知豆斯　ク　ワレハワスレジ　ウチテシ
夜麻牟　ヤマム

菟道稚郎子、異母兄大山守皇子の叛けるを討ち給はむとして、兵を宇治の川上に伏せける時詠める歌

知波夜比登　宇遲能和多理邇　和　チハヤヒト　ウヂノワタリニ　ワ
多理是邇　多豆流　阿豆佐由美　タリゼニ　タテル　アヅサユミ
麻由美　伊岐良牟登　許許呂波母　マユミ　イキラムト　ココロハモ
閉杼　伊斗良牟登　許許呂波母閉　ヘド　イトラムト　ココロハモヘ
杼　母登幣波　岐美袁淤母比傳　ドモトヘハ　キミヲオモヒデ
須惠幣波　伊毛袁淤母比傳　伊良　スエヘハ　イモヲオモヒデ　イラ
那祁久　曾許爾淤母比傳　加那志　ナケク　ソコニオモヒデ　カナシ
新久　許許爾淤母比傳　伊岐良受　ケク　ココニオモヒデ　イキラズ
曾久流　阿豆佐由美　麻由美　ゾクル　アヅサユミ　マユミ

5・7、5、3、5、7、5、7、5、7
5・7、5・7、5・7、5・7、7、5、7

第參章　散文

上古の散文こゝて史に徵すべきは、此の時代の末葉に作られたる祝詞・壽詞の類あるのみ。これより先、神功皇后の攝政中に書を裁して魏晉の両國に遣はし、履仲天皇の御宇に史官を置きて四方の言事を記さしめ給ひし事は、共に國史に見えたれども、其の文傳はらねば知るに由なし。

祝詞も壽詞も、共に神前に告白する詞にて、或は祭祀につきて其の所以を陳じ、或は事物を讃して神德を稱へ、或は神代の舊事・曩祖の事蹟を陳べて御代を壽ぐものあり。故に、是等の詞は、以上の目的の外、間接には祭祀に與れる群臣は更なり、遠鄕遐陬の民に至るまで、亦漸次に相承して建國の基本を明かにし、又は人の心を公明あらしむる料となりたるなるべし。二者共に、句節を整へ、枕辭を冠し、對句・疊語などありて、聲調の優麗あること、をさ〳〵歌謠の姿にも讓らざる趣あり。是れもと口傳相承の必要なる時代にあれりしによるならむ。散文にして歌謠の姿を具ふるとは、蓋し上代に於ける文學自然の進路なり。之を此の時代の散文の特色とす。壽詞にては出雲國造神賀詞最も佳く、祝詞にては祈年祭・大祓・大殿祭の詞など最も古くして、且つ其の詞うるはしく、調は高雅なり。是等は共に『延喜式』なる祝詞式に錄せられて現存せり。

祝詞の濫觴は、天照大神の天の窟戸に籠りたまひし時、天兒根命が白しける太諄辭にあるべけれども、今に傳はらず。賀茂眞淵の說に、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に作られ、大祓詞は天智若しくは天武の頃に作られたりといひ、本居宣

長は之を難じて、大祓大殿祭の詞は既に神武の御代にあり、きこゆべし。要するに、祝詞・壽詞の作られたる時代は、また式定せる確證あるにあらず。

其の文體は、主として漢字の正訓並に正音を並用し、助辭は便宜上之を細書し、すべて國語をさながらに寫したり。左に壽詞の一例を掲げむ。

大祓

出雲國造神賀詞

八十日日波在登毛今日能生日能足日爾出雲國國造姓名恐美恐美毛申賜久掛麻久毛畏岐明御神登大八島國所知食須天皇命乃大御世乎手長能大御世止齊止爲氐出雲國乃青垣山內爾下津石根爾宮柱太敷立氐高天原爾千木高知坐須伊射奈伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎其甲我弱肩爾太襷取掛天伊都幣能緒結天乃美賀祕冠利天伊豆能眞屋爾麁草乎伊豆能席登苅敷支天伊都閉黑益之天能踏和爾齋許母利氐志都宮爾靜米仕奉氐朝日能豐榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久止奏

高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎

イヅモノクニノミヤツコノカムヨゴトヽ

ヤソカヒアレドモケフノイクヒノタリヒニイヅモノクニノミヤツコナニガシカシコミカシコミモマヲシタマハクカケマクモカシコキアキツミカミトオホヤシマクニシロシメススメラミコトノオホミヨヲタナガノオホミヨトイハブトシテイヅモノクニノアヲカキネノチニシダツイハチニミヤバシラフトシクタテタカマノハラニチギタカシリマスイザナギノヒマナゴカブロギクマヌノオホカミクシミケヌノミコトクニツクリマシヽオホナモチノミコトフタバシラノカミヲハジメテモヽヤソマリムヤシロニマススメカミタチヲソレガシガヨワカタニフトダスキトリカケテイヅヌサノヲムスビアメノミカゲトカヽブリテイヅノマヤニアラクサヲイヅノムシロトカリシキテイヅヘクロマシアメノミカワニイミコモリテシヅミヤニシヅメツカヘマツリテアサヒノトヨサカノボリニイハヒノカヘリゴトノカムホギノヨゴトマヲシタマハクトマヲス

タカマノカムロギタカミムスビカミムスビノミコトノスメミマノミコトニアメノシタ

事避奉之時出雲臣等我遠祖天穗日命乎國體見爾遣時爾天能八重雲乎押別氏天翔國翔氏天下乎見廻氏返事申給久豐葦原乃水穗國波豈波如五月蠅水沸支夜如火瓮光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利然毛鎮平天皇御孫命爾安國登平久所知坐平之米登申氏己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天荒留布神等乎撥平氣國作之大神毛乎媚鎮天大八島國現事顯事令事避支乃大穴持命乃申給久皇御孫命乃靜坐平大倭

オホヤシマクニヲコトヨサシマヅラシヽトキニイヅモノオミラガトボツオヤアメノホヒノミコトヲクニカタミニツカハシヽトキニアメノヤヘグモヲオシワケテアマカケリクニカケリテアメノシタヲミメグリテカヘリコトマヲシタマハクトヨアシハラノミヅホノクニハヒルハサバヘナスミナワキヨルハホベノゴトカヾヤクカミアリイハヲキヲタチアヲミナワモコトトヒテアラブルクニナリシカレドモシヅメムケテスメミマノミコトニヤスクニトタヒラケクシロシマサシメムトマヲシテオノレミコトノミコアメノヒナトノリミコトニフツヌシノミコトヲソヘテアマクダシツカハシテアラブルカミドモヲハラヒタヒラゲクニツクラシヽオホカ

國申天巳命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛瓊玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐己命乃御子阿遲須伎高彦根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備爾坐事代主命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐乎宇奈提爾坐賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天皇御孫命能近守神登貢置天八百丹杵築宮爾靜坐支是爾親神魯伎神魯命美宣久汝天穗比命波天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閉奉登仰賜志次乃隨爾供齋

ミヲモコビシヅメテオホヤシマクニウツシコトアラハコトコトサラシメキスナハチオホナモチノミコトノマヲシタマハクスメミマノミコトノシヅマリマサムオホヤマトノクニマヲシテオノレミコトノニギミタマヲヤタカヾミニトリツケテヤマトノオホモノヌシクシミカタマノミコトトナヲタヽヘテオホミワノカミナビニマセオノレミコトノミコアヂスキタカヒコネノミコトノミタマヲカツラギノカモノカミナビニマセコトシロヌシノミコトノミタマヲウナデニマセカヤナルミノミコトノミタマヲアスカノカミナビニマセテスメミマノミコトノチカキマモリガミトタテマツリオキテヤホニキヅキノミヤニシヅマリマシキ

仕奉氏朝日乃豐榮登爾神乃
禮自利臣能禮自登御禮乃神
寶獻瓦久奏白玉能大御白髮
坐赤玉能御阿加良毘坐青玉
能水江玉乃行相爾明御神登
大八島國所知天皇命能手長
大御世乎御横刀廣爾誅堅米
白御馬前足爪後足爪踏立
事波大宮能內外御門柱乎上
津石根爾踏堅米下津石根爾
踏凝之振立流事波耳能彌高
乎天下乎所知食左事志多米
白鶴乃生御調能玩物登倭文
能大御心毛多親爾彼方能古
川岸此方能古川岸爾生立若

コヽニムツカムロギカムロミノミコトノ
リタマハクイマシアメノホヒノミコトハス
メラミコトノタナガノオホミヨヲカキハニ
トキハニイハヒマツリイカシノミヨニサキ
ハヘマツレトオホセタマヒシツイデノマニ
マニイハヒコトツカヘマツリテアサヒノト
ヨサカノボリニカミノキヤジリオミノキヤ
ジトミホギノカムタカラタテマツラクトマ
ヲスシラタマノオホミシラガマシアカダマ
ノミアカラヒマシアヲタマノミヅエタマノ
ユキアヒニアキツミカミトオホヤシマクニ
シロシメススメラミコトノタナガノオホミ
ヨヲハカシニヒロラニウチカタメシロミマ
ノマヘアシノツメシリヘアシノツメフミタ
ツルコトハオホミヤノウチトノミカドノハ

水沼間能彌若叡爾御若叡坐
須々伎振遠止美仍水乃禰乎
知爾御袁知坐麻蘇比乃大御
鋭乃面乎意志波留志天見行
事能已登久明御神能大八島
國乎天地日月等共爾安久平
久知行牟事能志太米登御禮
乃神寶乎奉持氏神禮自利臣
禮自登恐彌恐毛彌天津次能神
賀吉詞白賜登久奏

シラヲウハツイハネニフミカタメシタツイ
ハヂニフミコラシフリタツルコトハミミノ
イヤタカニアメノシタヲシロシメサムコト
ノシタメシラトリノイキミツギノモテアソ
ビモノトシヅノオホミコヽロモタシニヲチ
ノフルカハギシコチノフルカハギシニオヒ
タテルワカクルスノイヤワカエニミワカエ
マシスヽギフルヲドミノミヅノイヤヲチニ
ミヲチマシマソヒノオホミカヾミノオモヲ
オシハルシテミソナハスコトノゴトクアキ

ツミカミノオホヤシマクニヲアメツチツキヒトトモニヤスケクタヒラケクシロシメサ
ムコトノシタメトミホギノカムタカラヲサヽゲモチテカミノキヤジリオミノキヤジト
カシコミカシコミモアマツツイデノカムホギノヨゴトマヲシタマハクトマヲス

第貳編　奈良時代の文學

第壹章　總論

こゝに奈良時代と稱するは、政治史上の所謂奈良時代を指示するにあらず、其の範圍稍廣くして、皇極天皇の朝より平安遷都に至る十五代一百四十餘年間を總括するなり。

此の期は、盛に唐土の文明を摸倣したる時代にして、大學・國學の建設いよ〳〵繁く、遣唐使・留學生の派遣ます〳〵加はりぬ。漢學は殊に朝庭の奬勵する所なりしかば、其の進歩著く、學者彬々として輩出し、漢文學上の著作多く世にあらはれたり。元正天皇の御代に作られたる『日本書紀』、孝謙天皇の朝に編せられたる『懐風藻』の如きは、此の間の趨勢を代表するものなり。而して、佛教も亦本期に及びて盛に流行し、寺院

の建立佛像の鑄造日に月に增加し、僧尼の數は無慮數千にも餘りたり。從ひて、漢學と佛教とが人心に與へたる變動は甚だ大なるものありしなり。

かゝれば、此の時代に於ける國文學の發達は特に著きものありて、素撲なりし風姿は舊窠を脱して文華燦爛の域に進み、單純なりし思想は一轉して富贍の境に入りぬ。散文にしては『古事記』風土記・氏文・祝詞・宣命の類あり、歌謳にしては『萬葉集』あり。前者は未だ幼稚なるを免れずと雖も、散文の體用略具はれり。後者に至りては、空前絶後の偉觀と稱せらるゝところ、世人或は本期を稱して文學上歌謳の時世となすものあり。實に、歌聖として後人の追慕する柿本人麿と山部赤人とは、相次で此の時代に出で、其の他山上憶良・高橋蟲麿・額田女王・大伴旅人・同家持等の如き名匠あらはれて許多の秀

歌を詠出せり。

當期の文學は、上にも云へる如く、漢學及び佛教によりて發達を促されたること多く、其の自然の結果として多少儒佛の臭味を交へたるは云ふまでもなし。然れども、文學を一貫せる思想は、全く國民固有のものにして、かの外教の主義は未だ日本主義と融合するに至らざりしなり。

言語は、前代の末葉より漢學佛教の隆盛に赴くにつれて、外國語の混交愈多かりしかど、其の音韻稍變化して我が邦本來の言語と能く融合せること、大抵前期に於けるが如し。但し、漢學の講究は、記載語の上に至大の影響を及ぼし。從來漢字を假りて國語を寫しゝものも、次第に漢文を以て之に代ふる風を致せり。加之、此の時代の末には、漢文あらざる文章に未だ普通の言語たらざる漢語を交へたるが出來て、文章

上の用語と普通の用語と漸く離隔せむとする傾向をあらはせり。

文字は、本期の末に及びて特に發達し、片假名といふものを見るに至りぬ。片假名は漢字の點畫偏傍を省略して作りたる一種の記號的文字たり。此のもの、最初は多畫なる漢字を記する煩勞を避けむがために用ゐられしが、漸く發達して今日の五十音圖の組織とはなりぬ。該音圖の創始者は吉備眞備なりといふ。尚ほ、此の時代には孝謙天皇の頃に印刷術の傳來ありて、更にまた文運開進の途を夷かにせり。然れども、片假名及び印刷術が、實際の効果を收めて、文學上に著き神益を與へたるは、次期の事に屬す。

第貳章　歌謳

第壹節　總說

太古より千數百年の間、自然の發達に委ねられたる歌謳は、時勢の進むに伴はれて、今や未曾有の發伸を爲したり。是れ前章に記載したるが如く、漢學及び佛教の東漸が太く人智の開發を促したるに依るなり。是に至りて、從來曾て見えざりし複雜なる詩想も次第に見え、是れまで、定まらざりし形式も遂に略定まりぬ。殊に、持統天皇の朝に柿本人麿・山部赤人等の續出するに及びては、斐然として和歌極盛の運に達せり。

此の期の歌謳も、亦多くは前期の如く、事物に觸れて自然の感想を詠出したるものなるが、後には稍題詠めきたること

も行はれたり。額田女王が春秋の優劣を判じたるが如き、即ち其の一例なり。現存せる歌謳の中には、時に或は拙劣なるものなきにあらずと雖も、概しては工夫精緻・想像深刻・用語は雅馴なり。上は天皇より下は野人に至るまで、歌を詠みたること前期におなじ。當代の歌を集めたるものを『萬葉集』といふ。我が邦歌集の權輿なり。余輩が奈良時代の歌謳を知るは全く此の集あるに依る。

第貳節　『萬葉集』

『萬葉集』の撰者並に撰定の時代は詳かならず。或は孝謙天皇の朝に橘諸兄之を撰ばむとして中途に薨ぜしかば、後に大伴家持其の業を紹ぎて增補完成せるものならむといふ。載錄するところの歌は、仁德天皇の御宇より淳仁天皇の朝に

至るまで、凡そ四百年間に亘れども、其の大部分は天武天皇以後およそ九十餘年間のものなり。歌の數は、長歌二百六十二首、短歌四千一百七十三首、旋頭歌六十一首、連歌一首、すべて四千四百九十七首、分ちて二十卷とせり。其の形式に從ひて、歌の種類を長歌・短歌・旋頭歌・連歌等の名目に分ちたるは、此の集を以て始とす。

此の集、また歌の內容により部類を立て、雜歌・相聞・挽歌・譬喩歌・四季相聞・四季雜歌の六種とせり。雜歌は後の歌集に雜の部といへるものより範圍稍廣く、行幸・肆宴を始め～て羈旅・問答・其の外種々の歌の他の部類に屬しがたきを集めたり。相聞は後の所謂戀歌なれど、また稍廣くして君臣・父子・兄弟・朋友間等の相思の情を述べたるをも收めたり。挽歌は後の哀傷の歌にして、譬喩歌は物に寄せて感情を詠じたるもの

なり。此の外、別に反歌と呼びて長歌の末に一二首づゝ副ふるものあり。こは舒明天皇の頃より出來たるものなるが、全く通常の短歌の體にして、本歌なる長歌の意の足らざるを補ひ、或は其の大意を約言する用を爲せり。蓋し、其の名稱は長歌の意を折りかへして歌ふといふ義に採れるなり。

歌語は、なほ前代に於けるが如く、當時の通用語につきて雅馴なるものを擇びしこといふまでもなし。かの防人の歌若しくは東歌の如き、俗謠より採りたるには、稍異常の躰なるも見えたれど、而も古雅なること都人士の作に讓らざるものあり。孰れも枕辭を冠し、疊語・對句を設けて、語調を整へ、風姿を修飾せり。

『萬葉集』の歌の書き方は、すべて漢字を用ゐたれど、また一種獨特の風あり。卽ち、『古事記』『日本書紀』に出でたる歌は、專ら

字音にのみよりて記載し、祝詞式は助辭を細書して主屬の別を詳かにせしかど、此の集に於いては全く其等と異なりて、漢字の用法につきて一層の進歩をあらはしぬ。世にこれを萬葉書と稱へ、其等の漢字を總稱して萬葉假名といふ。大別して四種とす。曰はく假字、曰はく借訓、曰はく正訓、曰はく義訓。是れなり。第一に、假字には音假字・訓假字の二種あり。安・已・烏・延・憶・可・吉・求・鶏・居の如く漢吳の音を借れるを音假字といひ、日・木・來・異・兒・猿・石・渚・背・苑の如く字訓に據りたるを訓假字といふ。從ひて、假字の中にはまた自然に正略の別あり。已・烏・可・求・居の如きは正音假字にして、安・延・憶・吉・鶏の類は略音假字なり。さてまた、日・木・來・異・兒の如きは正訓假字にして、猿・石・苑の類は略訓假字なり。別に訓假字には二字一訓なるあり。嗚呼・馬聲・羊蹄の類是れあり。第二に、借訓とは、葬を六倉、海

苔を法と書ける類をいふ。第三に、正訓とは、月をツキ、丈夫をマスラヲと讀ませたる類にして、第四に義訓とは、山上復有山を出、十六を猪、懸水を涙と讀ませたる類なり。此の外になほ、起を己、弦を玄とせる如く、字畫を省けるあり。山下出風を山下又たは下風とせる如く、文字を略せるあり。就中、其の用法の極めて奇なるは、前に出せる馬聲の如き、又は山上復有山の如き戯書あり。此の事小なりと雖も、或は以て當時漢字を用ゐることの巧妙なりしを察すべく、或は以て時尚の一斑を窺ふべし。

此の集の歌は自然の感情をさながらに詠出して、些の彫琢をも施さざるもの多し。故に、其の姿勢おほむね自然に、風雅また雄偉なり。但し、其の雄渾偉大なるは、天眞なる感情の偶外界の事物に觸れて得たる聲なりしを以て、時としてはま

た拙劣の難あるものなきにあらず。想ふに、當代の歌人等は歌謳の美文なるべきを知らずして、其の想の撰擇に意を注がざりしに依るならむ。集中にて最もすぐれたるを長歌とす。其の素撲なる言詞は自然の美に觸るゝ如く、天眞なる情想はおのづから絶妙の調を爲せり。かの歌として拙劣なるものと雖も、概しては至誠の眞情を籠めざるなし。

さて、此の時代の文學は、屢言ひし如く、漢學及び佛教の普及によりて著き進歩をなせしが、其等の影響は直に此の集の歌にもあらはれたり。例へば、大伴旅人が酒を讃せし歌の中に、

古之　七賢　人等毛　　イニシヘノ　ナヽノカシコキ　ヒトタチモ
欲爲物者　酒西有良師　　ホリセシモノハ　サケニシアラシ
夜光　玉跡言十方　酒飲而　　ヨルヒカル　タマトイフトモ　サケノミテ
情乎遣爾　豈若目八目　　コヽロヲヤルニ　アニシカメヤモ

といひ、或人の

心乎之　無何有乃鄕爾　置而有者　　コヽロヲシ　ムカウノサトニ　オキタラバ
藐孤射能山乎　見末久知香谿務　　ハコヤノヤマヲ　ミマクチカケム

といへるは、漢籍の知識より來れるものなり。又、或人の世間の無常を厭へる歌として、

生死之　二海乎　厭見　　イキシエノ　フタツノウミヲ　イトヒミオ
潮干乃山乎　之努比鶴鴨　　シホヒノヤマヲ　シヌビツルカモ
世間之　繁借廬爾　住々而　　ヨノナカノ　シゲキカリホニ　スミスミテ
將至國之　多附不知聞　　イタラムクニノ　タツキシラズモ

と詠ぜるは、其の題の如く釋敎の觀念より來れるもの、更に之を大にして大伴家持の作に、

天地之　遠始欲　俗中波　常無毛　　アメツチノ　トホキハジメヨ　ヨノナカハ　ツネナキモノト　カタリツギ　ナガラヘキタレ
能等　語續　奈我良倍伎多禮　天　　
原　振左氣見濃　照月毛　盈昃之　　アマノハラ　フリサケミレバ　テルヒ

家里　安之比奇能　山之木末毛
ツキモ　ミチカケシケリ　アシヒキノ　ヤ
春去婆　花開爾保比　秋都氣婆
マノコヌレモ　ハルサレバ　ハナサキニホ
露霜負而　風交　毛美知落家利
ヒ　アキヅケバ　ツユシモオヒテ　カゼマ
宇都勢美母　如是能未奈良之　紅
ジリ　モミヂチリケリ　ウツセミモ　カク
能　伊呂母宇都呂比　奴婆多麻能
ノミナラシ　グレナキノ　イロモウツロヒ
黒髪變　朝之咲　暮加波良比　吹
ヌバタマノ　クロカミカハリ　アサノエミ
風能　見要奴我其登久　逝水能
ユフベカハラヒ　フクカゼノ　ミエヌガゴ
登麻良奴其等久　常毛奈久　宇都
トク　ユクミヅノ　トマラヌゴトク　ツネ
呂布見者　爾波多豆美　流滯　等
モナク　ウツロフミレバ　ニハタミヅ　ナ
騰米可禰都母
ガルヽナミダ　トヾメカネツモ

といへるは、宋之問が「有所思」の歎とおなじく、全く佛教思想を謳へるものなり。かゝる例なほ甚だ多し。然れども、全集を貫通して見らるゝは、漢學若しくは佛教の旨義にあらずして、全く我が國民的性情なり。茲に國民的性情とは、我が國民

が常の心となせる敬神の念、忠君の志氣、さては崇祖の情をいふ。約言すれば、我が建國の基本とせる惟神の道、彝倫の教、即ち是れなり。山上憶良が好去好來の歌に、

神代欲理　云傳介良久　虛見通
カミヨヨリ　イヒツテケラク　ソラミツ
倭國者　皇神能　伊都久志吉國
ヤマトノクニハ　スメカミノ　イツクシキク
言靈能　佐吉播布國等　加多利繼
ニ　コトダマノ　サキハフクニト　カタリ
伊比都賀比計理　今世能　人母許
ツギ　イヒツガヒケリ　イマノヨノ　ヒト
等期等　目前爾　見在知在　人佐
モコトゴト　メノマヘニ　ミタリシリタリ
播爾　滿豆播阿禮等母　高光　日
ヒトサハニ　ミチテハアレドモ　タカヒカ
御朝庭　神奈我良　愛能盛爾　天
ル　ヒノミカド　カムナガラ　メデノサカ
下　奏多麻比志　家子等。撰多麻
リニ　アメノシタ　マヲシタマヒシ　イヘ
比天　勅旨反云大命　戴持豆　唐能
ノコト　エラビタマヒテ　オホミコト　イ
遣境爾　都加播佐禮　麻加利伊麻
タヾキモチテ　モロコシノ　トホキサカヒ
勢　宇奈原能　邊爾母奥爾母　神豆
ニ　ツカハサレ　マカリイマセ　ウナハラ
麻利　宇志播吉伊麻須　諸能　大
ノ　ヘニモオキニモ　カムヅマリ　ウシハ

御神等　船舳爾（反云布奈能閇爾）　道引麻　キイマス　モロ〳〵ノ　オホミカミタチ
遠志　天地能　大御神等　倭　大　フナノヘニ　ミチビキマヲシ　アメツチノ
國靈　久堅能　阿麻能見虛喻　阿　オホミカミタチ　ヤマトノ　オホクニミタ
麻賀氣利　見渡多麻比　事了　還　マ　ヒサカタノ　アマノミソラユ　アマガ
日者　又更　大御神等　船舳爾　ケリ　ミワタシタマヒ　コトヲハリ　カヘ
御手打掛豆　墨繩袁　播倍多留期　ラムヒニハ　マタサラニ　オホミカミタチ
等久　阿庭可遠志　智可能岬欲利　フナノヘニ　ミテウチカケテ　スミナハヲ
大伴　御津濱備爾　多太泊爾　美　ハヘタルゴトク　△△△△△　チカノサキ
船播將泊　都都美無久　佐伎久伊　ヨリ　オホトモノ　ミツノハマビニ　タダ
麻志豆　速歸坐勢　ハテニ　ミフネハハテム　ツツミナク　サ
キクイマシテ　ハヤカヘリマセ

いひ、或人の歌に、

多可美久良　安麻能日嗣等　天下　タカミクラ　アマノヒツギト　アメノシタ
志良之賣師家類　須賣呂伎乃　可　シラシメシケル　スメロギノ　カミノミコ
未能美許等能　可之古久母　波自　トノ　カシコクモ　ハジメタマヒテ　タフ

米多麻比豆　多不刀久母　左太　トクモ　サダメタマヘル　ミヨシヌノ　コ
米多麻敝流　美與之努能　許乃於　ノオホミヤニ　アリガヨヒ　メシタマフラ
保美夜爾　安里我欲比　賣之多麻　シ　モノノフノ　ヤソトモノヲモ　オノガ
布良之　毛能乃敷能　夜蘇等母能　オヘル　オノガナナオヒ　オホキミノ　マ
乎毛　於能我於敝流　於能我名名　ケノマニマニ　コノカハノ　タユルコトナ
負　大王乃　麻氣能麻爾麻爾　此　ク　コノヤマノ　イヤツギツギニ　カクシ
河能　多由流許等奈久　此山能　コソ　ツカヘマツラメ　イヤトホナガニ
伊夜都藝都藝爾　可久之許曾　都
可倍麻都良米　伊夜等保奈我爾

と歌へるは、其の好例なり。固より、神祇を敬し、君上を尊び、祖考を追崇するは、すべて古來我が國民が常の心ごせしことなりと雖も、能く之を發揮せしもの『萬葉集』歌人の如きはなし。實に、此の集の作者は、豊富なる想像と忠誠なる眞情とを以て、其の聲に活氣を與へたりと謂ふべし。

『萬葉集』の歌人の數は甚だ多き中に、額田女王・大伴旅人・阪上郎女・僧滿誓・長屋王・笠金村・高橋蟲麿・長意吉麿等は、其の尤ど稱せらる。而して、更に傑出せる者を柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴家持とす。此の四人は能く此の集の歌人を代表するに足る。

柿本人麿(一三六〇前後)は、天智天皇の御代に大和にて生れたりといひ傳へたれど、確かならず。廿六七歳の頃より朝廷に出で、持統・文武兩帝に仕へ、新田部・高市の諸皇子又は聖駕に陪從して近畿諸國を歷遊し、到る處に秀詠あり。後年筑紫に使し、又讃岐へも渡りしが、終に石見の國にて歿せり。其の歌の『萬葉集』に載れるは、長歌十七首・短歌五十九首にして、相思の情を寄せたるもの、哀悼の意を表せるもの、或は遊獵・懷古・旅行・祝賀等種々あり。其の調高潔にして、至誠の情内に溢

れ、殊に忠君の念・哀悼の意を抒べたるものは、句々肺肝より迸出する趣あり。時としては雄渾壯大、時としては優婉細緻、能く意に應じて措辭・聲調の變りゆくさま、眞個に常人の才にあらず。其の長歌に於いて殊に然り。後世赤人と並稱して二歌聖といふ。

山上憶良(一三九三歿)も、其の生年詳かならず。天平五年に齡七十四才にて終れりと傳へたり。大寶元年に遣唐少錄となり、後に從五位下伯耆守となりしが、神龜三年更に筑前守に任ぜられたり。憶良は、頗る漢學に通じ、兼ねてまた佛敎をも信じたり。殊に漢學は最も得意とせるところなりしかば、詩文の著作多きのみならず、其の影響詠歌の上にまで顯然たり。後に掲げたる感情を反さしむる歌の如きは其の適例なり。敬神・忠君の念に厚かりしは、前に擧げたる好去好來の歌

にても著し。また、其の貧窮問答歌と題するものは、同情の念充溢せるを以て世に名高し。總じて、憶良の歌は過强の姿あるも、詞形稍粗笨なり。憶良に一の著書ありて『類聚歌林』といへり。當時の名歌を集錄したるものなりしが、今に傳はらざるは惜むべし。

山部赤人(一三九〇前後)は、人麿と名を等しうせる人なり。其の傳また詳かならねど、聖武天皇の御代を盛にて過したるが如し。其の官は舍人あどにやありけむ。御幸に從ひて紀伊・大和・伊豫等の勝地を遊覽し、詔に應じて歌を奉りたること あり。東國に下りて駿河の富士に千古の白雪を賞し、下總の葛飾に眞間の手兒名が墳墓を訪ひしは、皆人の知るところなるべし。赤人は特に自然の美を詠ずることに妙を得、聲調は閑雅に、想像は穩健、巧に景物を寫して、激越ならざる中に

千鈞の力あり。而して、其の短歌の概して、長歌よりも優れること、恰も人麿の長歌のおほむね短歌にまされるが如し。紀貫之が『古今集』の序に、此の二人を評して、「人麿は赤人の上に立たむことかたく、赤人は人麿の下に立たむことかたし」といひしも、此の得失あるに依るめり。赤人が、また『萬葉集』歌人に通有なる特質を缺かざりしことは云ふまでもなし。

大伴家持(一四四五歿)は旅人の子なり。生誕の年月詳かならず。聖武天皇の朝より孝謙・淳和・稱德・光仁の四朝に歷事し、桓武天皇の延曆四年に薨ぜり。父祖共に高位の人なりしかば、家持は先づ內舍人に擧げられしが、累進して中納言・持節征東將軍となり、位は從三位に至りぬ。家世々武衛の職にありしを以て、忠誠の心を抽んで、只管父祖の名を辱めざらむと務めしこと、自詠の上にも見えたり。但し、儒佛の思想の加は

れること、前の三家に比ぶれば稍過ぎたり。想像は豊富あらされど、感情は燃ゆるが如く、其の歌ふところ哀切痛快なり。然れども、範圍狹く〳〵て平板に流れ、縹緲たる神韻に乏しきを失とす。

枚乃

過近江荒都時作歌　柿本人麿

王手次　畝火之山乃　橿原乃　日知之御世從　阿禮座師　神之盡　所知食　樫木乃　彌繼嗣爾　天下　所知之乎　天見　倭乎置而　青丹吉　平山越而　何方　所念計米可　天離　夷者雖不有　石走　淡海國乃　樂浪乃　大津宮爾　天下　所知食　兼　天皇之　神之御言能　大宮者　此間雖聞　大殿者　此間等雖云

タマタスキ　ウネビノヤマノ　カシハラノ　ヒシリノミヨユ　アレマシシ　カミノコト　ゴト　ツガノキノ　イヤツギツギニ　アメノシタ　シロシメシシヲ　ソラミツ　ヤマトヲオキテ　アヲニヨシ　ヒラヤマコエテ　イカサマニ　オモホシケメカ　アマザカル　ヒナニハアラネド　イハバシル　アフミノクニノ　サヽナミノ　オホツノミヤニ　アメノシタ　シロシメシケム　スメロギノ

霞立　春日香霧流　夏草香　繁成奴留　百磯城之　大宮處　見者悲毛

カミノミコトノ　オホミヤハ　ココトキケドモ　オホトノハ　ココトイヘドモ　カスミタツ　ハルヒオキヽル　ナツクサカ　シゲクナリヌル　モヽシキノ　オホミヤトコロ　ミレバカナシモ

樂波之　思賀乃辛崎　雖幸有　大宮人比　船麻知兼津　左散難彌乃　志賀能大和太　與杼六友　昔人二　亦母相目八毛

サヽナミノ　シガノカラサキ　サキクアレド　オホミヤヒトノ　フネマチカネツ　サヽナミノ　シガノオホワダ　ヨドムトモ　ムカシノヒトニ　マタモアハメヤモ

反歌

明日香皇女木槨殯宮之時作歌　同人

飛鳥　明日香乃河之　上瀨　石橋　下瀨　打橋渡　石橋渡　生靡留　玉藻毛叙　絶者生流　打橋　生乎爲禮流　川藻毛叙　干者波由流　何然毛　吾王乃

トブトリノ　アスカノカハノ　カミツセニ　イハバシワタシ　シモツセニ　ウチハシワタス　イハバシニ　オヒナビケル　タマモモゾ　タユレバオフル　ウチハシニ　オヒヲヲレル　カハモモゾ　カルレバハユル

立者　玉藻之如　許呂臥者
ナニシカモ　アガオホキミノ　タヽセバ

川藻之如久　靡相之　宜君之
タマモノゴトク　コロフセバ　カハモノゴ

朝宮乎　忘賜哉　夕宮乎　背
トク　ナビカヒシ　ヨロシキキミガ　アサ

賜哉　宇都曾臣跡　念之時
ミヤヲ　ワスレタマフヤ　ユフミヤヲ　ソ

春部者　花折挿頭　秋立者
ムキタマフヤ　ウツソミト　オモヒシトキ

黄葉挿頭　敷妙之　袖携　鏡
ニ　ハルヘハ　ハナヲリカザシ　アキタテ

成序　雖見不厭　三五月之　益
バ　モミチバカザシ　シキタヘノ　ソデタ

目頻染　所念之　君與時時
ヅサハリ　カヽミナス　ミレドモアカニ

幸而　遊賜之　御食向　木瑞
モチツキノ　イヤメヅラシミ　オモホシヽ

之宮乎　常宮跡　定賜　味澤
キミトトキドキ　イデマシテ　アソビタマ

相　目辭毛絶奴　所己乎之毛
ヒシ　ミケムカフ　キノヘノミヤヲ　トコ

棧爾憐　宿兄鳥之　片戀爲乍
ミヤト　サダメタマヒテ　アヂサハフ　メ

朝鳥　往來爲君之　夏草乃
コトモタエヌ　ソコヲシモ　アヤニカナシ

念之萎而　夕星之　彼往此去
ミ　ヌエトリノ　カタコヒシツヽ　アサト

大船　猶預不定見者　遣悶流
リノ　カヨハスキミガ　ナツクサノ　オモ

情毛不在　其故　爲便知之也
ヒシナエテ　ユフヅヽノ　カユキカクユキ

音耳母　名耳毛不絶　天地之
オホブネノ　タユタフミレバ　ナグサムル

彌遠長久　思將往　御名爾懸
コヽロモアラズ　ソコユエニ　セムスベシ

世流　明日香河　及萬代　早
ラニ　オトノミモ　ナノミモタエズ　アメ

布屋師　吾王乃　形見何此焉
ツチノ　イヤトホナガク　シヌビユカム

ミナニカヽセル　アスカガハ　ヨロヅヨマデニ　ハシキヤシ　アガオホキミノ　カタミ
ニココヲ

或有人不敬父母、忘於侍養、不顧妻子、輕於脫履、自稱異俗先生、意氣雖揚青雲之上、身體猶在塵俗之中、未驗修行得道之聖、蓋是亡命山澤之民、所以指示三綱、更開五教、道之以歌、令反其惑、歌曰、

山上憶良

父母乎　美禮婆多布斗斯　妻子美
チヽハヽヲ　ミレバタフトシ　メコミレバ

禮婆　米具斯宇都久志　道路得奴
メグシウツクシ　ノガロエヌ　ハラガラウ

兄弟親族　遁路得奴　老見幼見
朋友乃　言問交　余能奈迦波　加
久叙許等和理　母智騰利乃　可可
良波志母與　波夜可波乃　由久弊
斯良禰婆　宇既具都遠　奴伎都流
其等久　布美奴伎提　由久智布比
等波　伊波紀欲利　奈利提志比等
迦　奈何名能良佐禰　阿米弊由迦
婆　奈何麻爾麻爾　都智奈良婆
大王伊麻周　許能提羅周　日月能
斯多波　阿麻久毛能　牟迦夫周伎
波美　多爾具久能　佐和多流伎波
美　企許斯遠周　久爾能麻保良叙
可爾迦久爾　保志伎麻爾麻爾　斯
可爾波阿羅慈迦

ガラ　ノガロエヌ　オイミイトケミ　トモ
カキノ　コトドヒカハス　ヨノナカハ　カ
クゾコトワリ　モチドリノ　カカラハシモ
ヨ　ハヤカハノ　ユクヘシラチバ　ウケグ
ツヲ　ヌキツルゴトク　フミヌキテ　ユク
チフヒトハ　イハキヨリ　ナリデシヒトカ
ナガナノラサチ　アメヘユカバ　ナガマニ
マニ　ツチナラバ　オホキミイマス　コノ
テラス　ヒツキノシタハ　アマクモノ　ム
カブスキハミ　タニグクノ　サワタルキハ
ミ　キコシヲス　クニノマホラゾ　カニカ
クニ　ホシキマニマニ　シカニハアラジカ

反歌

比佐迦多能　阿麻遲波等保斯　奈
保奈保爾　伊弊爾可弊利提　奈利
乎斯麻佐爾

貧窮問答歌一首并短歌

風雜　雨布流欲乃　雨雜　雪布流
欲波　爲部母奈久　寒之安禮婆
堅鹽乎　取都豆之比呂　糟湯酒
宇知須須呂比豆　之波夫可比　鼻
毗之毗之爾　志可登阿良農　比宜
可伎撫而　安禮乎於伎豆　人者安
良自等　富己呂倍騰　寒之安禮婆
麻被　引甘賀布利　布可多衣　安
里能許等其等　伎曾倍騰毛　寒夜
須良乎　和禮欲利母　貧人乃　父

ヒサカタノ　アマヂハトホシ　ナホナホニ
イヘニカヘリテ　ナリヲシマサニ

同　人

カゼマジリ　アメフルヨノ　アメマジリ
ユキフルヨハ　スベモナク　サムクシアレ
バ　カタシホヲ　トリツヅシロヒ　カスユ
サケ　ウチススロヒテ　シハブカヒ　ハナ
ビシビシニ　シカトアラヌ　ヒゲカキナデ
テ　アレヲオキテ　ヒトハアラジト　ホコ
ロヘド　サムクシアレバ　アサフスマ　ヒキ
カガフリ　ヌノカタキヌ　アリノコトゴト
キソヘドモ　サムキヨスラヲ　ワレヨリモ
マヅシキヒトノ　チヽハヽハ　ウエサムカ

母波　飢寒良牟　妻子等波　乞豆
泣良牟　此時者　伊可爾之都都可
汝代者和多流　天地者　比呂之等
伊倍杼　安我多米波　狹也奈理奴
流　日月波　安可之等伊倍騰　安
我多米波　照哉多麻波奴　人皆可
吾耳也之可流　和久良婆爾　比等
等波安流乎　比等奈美爾
作乎　綿毛奈伎　布可多衣乃　美
留乃其等　和和氣佐我禮流　可可
布能尾　肩爾打掛　布勢伊保能
麻宜伊保乃內爾　薬解敷　直土爾
而　父母波　枕乃可多爾　妻子等
母波　足乃方爾　圍居而　憂吟
可麻度柔播　火氣布伎多豆受　許

ラム　メコドモハ　コヒラナクラム　コノ
トキハ　イカニシツツカ　ナガヨハワタル
アメツチハ　ヒロシトイヘド　アガタメハ
サクヤナリヌル　ヒツキハ　アカシトイヘ
ド　アガタメハ　テリヤタマハヌ　ヒトミ
ナカ　アノミヤシカル　ワクラバニ　ヒト
トハアルヲ　ヒトナミニ　アレモツクルヲ
ワタモナキ　ヌノカタキヌノ　ミルノゴト
ワワケサガレル　カカフノミ　カタニウチ
カケ　フセイホノ　マゲイホノウチニ　ヒ
タツチニ　ワラトキシキテ　チヽハヽハ
マクラノカタニ　メコドモハ　アトノカタ
ニ　カクミキテ　ウレヒサマヨヒ　カマド
ニハ　ケブリフキタテズ　コシキニハ　ク
モノスカキテ　イヒカシク　コトモワスレ

之伎爾波　久毛能須可伎豆　飯炊
事毛和須禮提　奴延鳥乃　能杼與
比居爾　伊等乃伎提　短物乎　端
伎流等　云之如　楚取　五十戸長
我許惠波　寢屋度麻豆　來立呼比
奴　可久婆可里　須部奈伎物能可
世間乃道

反歌

世間乎　宇之等夜佐之等　於母倍
杼母　飛立可禰都　鳥爾之阿良禰
婆

望不盡山歌

天地之　分時從　神佐備手
高貴寸　駿河有　布士能高嶺
乎　天原　振放見者　度日之

テ　ヌエトリノ　ノドヨビヲルニ　イトノ
キテ　ミジカキモノヲ　ハシキルト　イヘ
ルガゴトク　シモトトル　サトヲサガコエ
ハ　ネヤドマデ　キタチヨバヒヌ　カクバ
カリ　スベナキモノカ　ヨノナカノミチ

ヨノナカヲ　ウシトヤサシト　オモヘドモ
トビタチカネツ　トリニシアラネバ

山部赤人

アメツチノ　ワカレシトキユ　カミサビテ
タカクタフトキ　スルガナル　フジノタカ
ネヲ　アマノハラ　フリサケミレバ　ワタ

陰毛隱比　照月乃　光毛不見　ルヒノ　カゲモカクロヒ　テルツキノ　ヒ
白雲毛　伊去波伐加利　時自　カリモミエズ　シラクモモ　イユキハバカ
久曾　雪者落家留　語告　言　リ　トキジクゾ　ユキハフリケル　カタリ
繼將往　不盡能高嶺者　ツギ　イヒツギユカム　フジノタカネハ

反歌

田兒之浦從　打出而見者　眞白衣　タゴノウラユ　ウチデテミレバ　マシロニ
不盡能高嶺爾　雪波零家留　ゾ　フジノタカネニ　ユキハフリケル

過敏馬浦時作歌一首井短歌　同人

御食向　淡路乃島二　直向　ミケムカフ　アハヂノシマニ　タヾムカフ
三犬女乃浦能　奥部庭　深海　ミヌメノウラノ　オキヘニハ　フカミルツ
松採　浦回庭　名告藻苅　深　ミ　ウラミニハ　ナノリソカリ　フカミル
見流乃　見卷欲跡　莫告藻之　ノ　ミマクホシケド　ナノリソノ　オノガ
己名惜三　間使裳　不遣而吾　ナヲシミ　マツカヒモ　ヤラズテアレバ
者　生友奈重二　イケリトモナシ

反歌一首

爲間乃海人之　鹽燒衣乃　奈禮名　スマノアマノ　シホヤキキヌノ　ナレナバ
者香　一日母君乎　忘而將念　カ　ヒトヒモキミヲ　ワスレテオモハム

幸于紀伊國時作歌　同人

若浦爾　鹽滿來者　滷乎無美　ワカノウラニ　シホミチクレバ　カタヲナ
邊乎指天　多頭鳴渡　ミ　アシベヲサシテ　タヅナキワタル

春雜謌　同人

春野爾　須美禮採爾等　來師吾曾　ハルノヌニ　スミレツミニト　コシアレゾ
野乎奈都可之美　一夜宿二來　ヌヲナツカシミ　ヒトヨネニケル
吾勢子爾　令見常念之　梅花　アガセコニ　ミセムトオモヒシ　ムメノハナ
其十方不所見　雪乃零有者　ソレトモミエズ　ユキノフレレバ

夏雜歌　同人

戀之家婆　形見爾將爲跡　吾屋戸　コヒシケバ　カタミニセムト　アガヤドニ
爾　殖之藤浪　今開爾家里　ウエシフヂナミ　イマサキニケリ

詠故太政大臣藤原家之山池歌　同人

昔者之舊堤者　年深　池之瀲爾　イニシヘノ　フルキツヽミハ　トシフカミ
水草生家里　イケノナギサニ　ミクサオヒケリ

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時作歌

同人

烏玉之　夜乃深去者　久木生留　ヌバタマノ　ヨノフケヌレバ　ヒサキオフル
清河原爾　知鳥數鳴　キヨキカハラニ　チドリシバナク
足引之　山毛野毛　御猟人　アシヒキノ　ヤマニモヌニモ　ミカリヒト
得物矢手挾　散動而有所見　サツヤタバサミ　サワギタツミユ

大伴家持

慕振勇士之名歌一首井短歌

智智乃實乃　父能美許等　波播麻
チチノミノ　チヽノミコト　ハヽソバノ
業乃　母能美己等　於保呂可爾
ハヽノミコト　オホロカニ　コヽロツクシ
情盡而　念良牟　其子奈禮夜母
テ　オモフラム　ソノコナレヤモ　マスラヲヤ
大夫夜　無奈之久可在　梓弓　須
ムナシクアルベキ　アヅサユミ　スエ
惠布理於許之　投矢毛知　千尋射
フリオコシ　ナゲヤモチ　チヒロイワタシ
和多之　劒刀　許思爾等里波伎
ツルギタチ　コシニトリハキ　アシビキノ

安之比奇能　八峯布美越　左之麻
久流　情不障　後代乃　可多利都
俱倍久　名乎多都倍志母
ヤツヲフミコエ　サシマクル　コヽロサヤラズ　ノチノヨノ　カタリツグベク　ナヲタツベシモ

反歌

丈夫者　名乎之立倍之　後代爾
マスラヲハ　ナヲシタツベシ　ノチノヨニ
聞繼人毛　可多里都具我禰
キヽツグヒトモ　カタリツグガネ

傷亡妾歌一首井短歌

同人

吾屋前爾　花曾咲有　其乎見
杼　情毛不行　愛八師　妹之
有世婆　水鴨成　二人雙居
手折而毛　令見麻思物乎　打
蟬乃　借有身在者　露霜乃
消去之如久　足日木乃　山道
乎指而　入日成　隱去可婆
曾許念爾　胸己所痛　言毛不
ワガヤドニ　ハナゾサキタル　ソヲミレド
コヽロモユカズ　ハシキヤシ　イモガアリセバ　ミカモナス　フタリナラビヰ　タヲリテモ　ミセマシモノヲ　ウツセミノ　カレルミナレバ　ツユシモノ　ケヌルガゴトク　アシビキノ　ヤマヂヲサシテ　イリヒナス　カクリニシカバ　ソコモフニ　ムネコソイタメ　イヒモカネ　ナヅケモシラニ

得　名付毛不知　跡無　世間　アトモナキ　ヨノナカナレバ　セムスベモ
爾有者　將爲須辨毛奈思　ナシ

反歌

時者霜　何時毛將有乎　情哀　トキハシモ　イツモアラムヲ　コヽロイタク
伊去吾妹可　若子乎置而　イユクワギモカ　ワカキコヲオキテ
出行　道知末世波　豫　イデユカス　ミチシラマセバ　アラカジメ
妹乎將留　塞毛置末思乎　イモヲトヾメム　セキモオカマシヲ

夏歌　持統天皇

春過而　夏來良之　白妙能　ハルスギテ　ナツキタルラシ　シロタヘノ
衣乾有　天之香來山　コロモホシタリ　アメノカグヤマ

左大臣葛城王等賜姓橘氏之時御製歌　聖武天皇

橘花者　實左倍花左倍　其葉左倍　タチバナハ　ミサヘハナサヘ　ソノハサヘ
枝爾霜雖降　益常葉之樹　エダニシモオケド　イヤトコハノキ
故郷里　長屋王

吾脊子我　古家乃里之　明日香庭　ワガセコガ　フルヘノサトノ　アスカニハ
乳鳥里鳴成　君待不得而　チドリナクナリ　キミマチカネテ

應詔歌

大宮之　內二手所聞　網引爲跡　オホミヤノ　ウチマデキコユ　アビキスト
網子調流　海人之呼聲　アゴトヽノフル　アマノヨビコエ

秋歌　大伴旅人

吾岳之　秋茅花　風乎痛　ワガヲカノ　アキハギノハナ　カゼヲイタ
可落成　將見人裳欲得　ミ　チルベクナリヌ　ミムヒトモガナ

在寧樂家思故郷歌　同人

須臾　去而見牡鹿　神名火乃　シバラクモ　ユキテミテシカ　カミナビノ
淵者淺而　瀨二香成良武　フチハアサヒテ　セニカナルラム

(無題)　大伴坂上郎女

久堅乃　天露霜　置二家里　ヒサカタノ　アマノツユシモ　オキニケリ
宅有人毛　待戀奴濫　イヘナルヒトモ　マチコヒヌラム

竹田庄作歌

隱口乃　始瀨山者　色附奴
鐘禮乃雨者　零爾家良思母

コモリクノ　ハツセノヤマハ　イロツキヌ
シグレノアメハ　フリニケラシモ

石川郎女

(無題)

然之海人者　軍布苅鹽燒　無暇
髮梳乃小櫛　取毛不見久爾

シカノアマハ　メカリシホヤキ　イトマナ
ミ　クシゲノヲグシ　トリモミナクニ

神龜二年乙丑五月幸于芳野離宮作歌

笠金村

人皆乃　壽毛吾母　三吉野乃
多吉能床磐乃　常有沼鴨

ヒトミナノ　イノチモワレモ　ミヨシヌノ
タキノトコハノ　ツネナラヌカモ

同人

鹽津山作歌

丈夫之　弓上振起　射都流矢乎
後將見人者　語繼金

マスラヲノ　ユズエフリオコシ　イツルヤ
ヲ　ノチミムヒトハ　カタリツグガネ

(無題)

史生土師宿彌道良

努婆多麻乃　欲波布氣奴良之　多
末久志氣　敷多我美夜麻爾　月加
多夫仗奴

ヌバタマノ　ヨハフケヌラシ　タマクシゲ
フタガミヤマニ　ツキカタブキヌ

第參章　散文

第壹節　總說

奈良時代に於ける散文の發達は、其の歌謳の顯著なりしに比すれば、甚だ劣りたり。按ずるに、當代は漢學の奬勵其の効果を收めて、縉紳の間には漢文に堪能なるものあり、朝廷の記錄・制令の類は云ふまでもなく、庶民に告示する詔勅さへ、漢文にて物する傾向ありしかば、特に彼の文體を以て述べがたき場合の外、國語のまゝを寫せる文章の等閑に附せら

れたるに依るならむ。然れども、其の內容に至りては、人智の發達と共に進歩の著かりし事論なし。漢學及び佛敎の思想の漸次に加はれることも、亦言ふを要せざらむ。此の時代の散文には、祝詞・宣命・國史及び風土記・氏文の類あり。こゝには、宣命・『古事記』・風土記(並に氏文)の三部に分ちて之を叙すべし。祝詞は前代に見えたると著き相違なきを以て之を錄せず。

第貳節　宣命

宣命とは、漢文にて綴れる詔勅に對して、國語にて物せる勅語の謂なり。今に殘れるは、持統天皇以後の朝廷に用ゐられたるものにて、『續日本紀』の中に見えたり。上代の勅語も、定めて皆此の宣命の文なりけむを、『日本書紀』に載するに當りて悉く漢文に反譯したるは惜むべし。宣命の作者は何人

なりしか詳かならねど、中務省なる大內記の起草せしものなりといふこと『職員令』に見えたり。其の文簡易を旨とし たれど、後には漢語・梵語を交へて佶屈なるもあり、其の意義さへ頗る國體を損するものあるに至りぬ。聖武天皇以後のもの殊に然り。

宣命の文詞は、上代より傳はれるを其のまゝに採用して殆ど定式の成句となりたるもあり、或は取捨改竄して時の便宜に從ひたるもあるべし。孰れも措辭の上に種々の修飾を施して、曲節の妙あらせむと務めたること、猶ほ祝詞の歌謳に類するが如し。彼は神前に告白する詞にて、是は庶民に宣り聞かする詞なれども、共に對手をして感動せしむるを目的とすればなり。故に、宣命の文にも、對句・疊語・枕辭等修飾とあるべき語を用ゐたるもの少からず。而して、之を宣傳する

には、讀方嚴正にして節譜あり、聲音明晰にして高調なる人、宣命使として之を務めたり。各段落の終末に至り、「諸きこし召さへ」と宣ぶる時は、太子親王先づ「唯(ヰ)」と答へ、次に諸人同聲に「唯(ヰ)」と答へたりとぞ。書き方は、祝詞が漢字もて國語を寫せると稍おなじく、漢字の正訓を用ゐ、且つ讀み易からむために細字もて、助辭の假字を挿入せり。世に之を宣命書と稱へて、前に見えたる萬葉書と區別す。

文武天皇即位の詔

現御神止大八嶋國所知天皇大命乎集待皇子等王臣百官人等天下公民諸聞食止詔高天原爾事始而遠天皇祖御世中今至麻弖天皇御子之阿禮坐牟彌繼繼爾大

アキツミカトミオホヤシマクニシロシメススメラガオホミコトラマトノリタマフオホミコトヲウコナハレルミコタチオホキミタチオミタチモヽノツカサノヒトタチアメノシタノオホミタカラモロ〳〵キコシメサヘトノルタカマノハラニコトハジメテトホス

八嶋國將知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉之隨聞看來此天津日嗣高御座之業止現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐旦此乃食國天下乎調賜比平賜比天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母隨神所思行佐久止詔天皇大命乎諸聞食止詔是以百官人等四方食國乎治奉止任賜弊留國國宰等爾至麻弖爾旦天皇朝庭敷賜行賜弊留國法乎過犯事無久明支淨支直支誠之心以而御稱稱而綏怠

メロギノミヨ〳〵ナカイマニイタルマデニスメラガミコノアレマサムイヤツギ〳〵ニオホヤシマクニシラサムツギテトアマツカミノミコナガラモアメニマスカミノヨサシマツリシマニマキコシメシクルコノアマツヒツギタカミクラノワザトアキツミカミトオホヤシマクニシロシメスヤマト子コスメラミコトノサヅケタマヒオホセタマフタフトキタカキヒロキアツキオホミコトヲウケタマハリカシコミマシテコノヲスクニアメノシタヲトヽノハタマヒタヒラゲタマヒアメノシタノオホミタカラヲメグミタマヒナデタマハムトナモカムナガラオモホシメサクトノリタマフスメラガオホミコトヲモロ〳〵キコシメサヘトノルコヽヲモテモヽノ

事無次務結而仕奉止詔大命乎諸聞食止詔故如此之狀乎聞食悟而欵將仕奉人者其仕奉禮耳狀隨品品讃賜上賜治將賜物皆止詔天皇大命乎諸聞食止詔

ツカサノヒトドモヨモノヲスクニヲヲサメマツレトマケタマヘルクニ〳〵ノミコトモチドモニイタルマデニスメラガミカドノシキタマヒオコナヒタマヘルクニノノリヲアヤマチオカスコトナクアカキキヨキナホキマコトノココロヲモチテイヤスヽミスヽミタタユミオコタルコトナクツトメシマリテツカヘマツレトノリタマフオホミコトヲモロ〳〵キコシメサヘトノルカレカクノサマヲキコシメシサトリテイソシクツカヘマツラムヒトハソノツカヘマツレラムサマノマニマシナ〳〵ホメタマヒアゲタマヒヲサメタマハムモノゾトノリタマフスメラガオホミコトヲモロ〳〵キコシメサヘトノル

此の外、元明・孝謙二帝の即位の宣命、さては聖武天皇立后の宣命等見るべきものあり。また、光仁天皇が左大臣藤原永手の薨去を吊ひし宣命は、更に世に稱せらる。是は文武天皇即位の宣命を距ること七十年の後なり。

第參節　『古事記』

推古天皇の二十八年に、聖德太子・蘇我馬子と共議して、天皇紀・國紀及び臣・連・伴造・百八十部並に公民等の本紀を錄し給ひたることあり。是れ正しく我が國修史の舉ありし始なれど、今は全く亡佚して詳かならず。然れば、今日に傳はれる國史の中にては、元明天皇の和銅五年に太安萬侶の勅を奉じて撰進したる『古事記』こそ、最も古きものといふべけれ。此の書三卷より成り、我が國の開闢より推古天皇の御代に至る世々の事蹟を總叙せるものなり。是れより先、天武天皇即位の十年、舍人稗田阿禮といふものを〳〵て皇帝の日繼及び先代の舊辭を口授せしめしが、中途にして崩ぜられしかば、安萬侶即ち阿禮の口授に基きて其の業を完成したるなり。

稗田阿禮(一三四〇前後)の閲歷は詳かならず。只、天武天皇の勅を奉ぜし頃は年二十八にて、博覽强記なりきと傳へたるのみ。太安萬侶(一三八三歿)の履歷は較明かなり。慶雲元年從五位に叙せられ、和銅四年正五位上に進み、勳五等を授けられき。『古事記』は、此の年九月十八日詔を蒙りて、翌年正月廿八日に完成したるなり。靈龜元年更に從四位下に進み、氏の長者となり、養老七年民部卿を以て卒しぬ。享年詳かならず。

『古事記』の文は、大方漢文にて物せられたれど、歌謳の類及び適當の漢語なき古語は、皆字音の假字にて其のまゝを寫したり。故に、此の書き方の主なるものには、(第一)純ら漢字の音を假りて寫せるもの、(第二)其の訓をも併せ用ゐること宣命書に類せるもの、(第三)文字の排列こそ轉倒して漢文に類すれ、實は我が國語の格と異ならざるもの、(第四)文字の排列

は勿論語格までも全く漢文に依れるもの、以上四種あり。其の他、春日・飛鳥・長谷・他田・三枝等は更に特殊の書き方なり。此の書、元來祝詞・宣命などゝは其の目的を異にしたれば、歌謳めきたる修飾を缺けりと雖も、變化自在にして且つ素樸遒强の風を帶びたり。之を『日本書紀』に比するに、此の文章の尨雜なるところ、或は彼の整然たるに讓ることなきに非ずと雖も、古傳說を直寫せる點に於いては、遂に此の書を推さゞるべからず。就中、上の卷は諸神の言語を其のまゝに寫せるところ多きを以て、中・下の二卷にまさりとす。其の記事には、往々奇怪なる想像に過ぎて、史的事實と認むること能はざるものありと雖も、猶ほ且つ或時代の人々が懷抱したる一種の感想として見るを得べし。實に、『古事記』は我が國史學上の一大著述にして、又國文學上の至寶なり。左に其

の神代の巻の中より一節を抄録す。

稲羽素兎の段

此大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避於大國主神所以避者其八十神各有欲婚稲羽之八上比賣之心共行稲羽時於大穴牟遲神負帒爲從者率往於是到氣多之前時裸兎伏也爾八十神謂其兎云汝將爲者浴此海鹽當風吹而伏高山尾上故其兎從八十神之敎而伏爾其鹽隨乾其身皮悉風見吹拆故痛苦泣伏者最後之來大穴牟遲神見其兎言何由汝泣伏兎答言僕在淤岐嶋雖欲

コノオホクニヌシノカミノミアニオトヤソカミマシキシカレドモミナクニハオホクニヌシノカミニサリマツリキサリマツリシユエンハソノヤソカミオノモ〳〵イナバノヤカミヒメヲヨバヽムノコヽロアリテトモニイナバニユキケルトキオホナムチノカミニフクロヲオホセトモピトトシテキテユキヽコヽニケタノサキニイタリケルトキニアカハタナルウサギフセリヤソカミソノウサギニイヒケラクイマシセムハコノウシホヲアミカゼノフクニアタリテタカヤマノヲノヘニフシテヨトイフカレソノウサギヤソカミノヲシフルマヽニシテフシキコヽニソノシ

度此地無度因故欺海和邇二字以音下效此言吾與汝競欲計族之多小故汝者隨其族在悉率來自此嶋至于氣多前皆列伏度爾吾蹈其上走乍讀度於是知與吾族孰多如此言者見欺而列伏之時吾蹈其上讀度來今將下地時吾云汝者我見欺言竟即伏最端和邇捕我悉剝我衣服因此泣患者先行八十神之命以誨告沿海鹽當風伏故爲如敎者我身悉傷於是大穴牟遲神敎告其兎今急往此水門以水洗汝身即取其水門之蒲黃敷散而輾轉其上者汝身

ホノカワクマニ〳〵ソノミノカハコト〳〵ニカゼニフキサカエシカラニイタミテナキフセバイヤハテニキマセルオホナムチノカミソノウサギヲミテナゾモイマシナキフセルトトヒタマフニウサギマヲサクアレオキノシマニアリテコノクニヽワタラマクホリツレドモワタラムヨシナカリシユエニウミノワニヲアザムキテイヒケラクアレトイマシトトモガラノオホキスクナキヲクラベテムカレイマシハソノトモガラノアリノコト〳〵キテキテコノシマヨリケタノサキマデミナナミフシワタレアレソノウヘヲフミテハシリツヽヨミワタラムコヽニアガトモガラトイヅレオホキトイフコトヲシラムカクイヒシカバアザムカエテナミフセリシトキ

如本膚必差故爲如敎其身如本也此稻羽之素菟者也於今者謂菟神也故其菟白大穴牟遲神此八十神者必不得八上比賣雖負帝汝命獲之

キウレヒシカバサキダチテイデマセルヤソカミノミコトモチテウシホヲアミテカゼニアタリフセレトヲシハタマヒキカレヲシヘノコトセシカバアガミコト〳〵ニソコナハエツトマヲスコヽニオホナムチノカミソノウサギニヲシヘタマハクイマトクコノミナトニユキテミヅモテナガミヲアラヒテスナハチソノミナトノカマノハナヲトリテシキチラシテソノウヘニコイマロビテハナガミモトノハダノゴトカナラズイエナムモノゾトヲシヘタマヒキカレヲシヘノゴトセシカバソノミモトノゴトクニナリキコレイナバノシロウサギトイフモノナリイマニウサギガミトナモイフカレソノウサギオホナムチソカミニマヲサクコノヤソカミハカナラズヤカミヒメヲエタマハジフクロワオヒタマヘレドモナガミコトゾエタマハムドマヲシキニアレソノウヘヲフミテヨミワタリキテイマツチニオリムトスルトキニアレイマシハワレニアザムカエツトイヒヲハレバスナハチイヤハシニフセルワニアヲドラヘテコト〳〵ニアガキモノヲバギヽコレニヨリテナ

第四節　風土記 附氏文

元明天皇の和銅六年五月、畿内並に七道の諸國に制して、郡鄕の名に好字を附せしめ、又其の郡内に生ずる産物の色目を錄し、及び土地の沃埆・山川原野の名號の由るところ、又古老相傳ふる舊聞・異事を史籍に載せて、言上せしめたる事あり。此の制に應じて諸國より奉りしもの、之を風土記とは言ふなり。されば、風土記とは地誌の類にして、傍ら其の國々の歷史を兼ねたるものなること、瞭かなり。當時は、諸國より奉りたる風土記も許多ありけむを、今は大方亡佚して、殘れるは只わづかに一部の『常陸風土記』あるのみ。而も、其の三郡を欠けり。また、『出雲風土記』は、巻末に天平五年二月三十日之を勘へつくること見えたれば、『常陸風土記』よりは三十年ばかりも後の作なり。肥前・豐後の風土記、亦出雲のと同じ頃

に成れるにや、其の體裁稍似たり。其の他『筑紫風土記』『土佐風土記』『備中風土記』『日向風土記』等の名稱は『萬葉集』の古註さては『釋日本紀』等に散見したれども、孰れも逸文にして全豹を窺ふに由なし。

風土記は各國より撰進せるものなれば、撰者の異なるに隨ひて文躰も亦等しからねど、大方は漢文躰に書かれたるが中に、古老の舊聞を錄せるあたりは、さすがに國語をさながらに寫したり。此の點より云へば、其の文躰は多少『古事記』に類して、稍漢文に依れるところ多きものなり。書中の記事は、物名等を列記せる部分多きが故に、概しては無味乾燥にして殆ど文學上の價値なき程なり。而して又、古傳に屬せる記事は、往々怪異に過ぎて、今日の人には信じがたき點あるを免れず。遮莫、余輩は之によりて當代に於ける人々の詩的

想像に富めりし一端を卜知するの便を得。風土記の作者は孰れも詳かならず。次に掲ぐるは、『出雲風土記』なる國引の故事を記せる一節なり。

國引の段

所以號意宇者國引坐八束水臣津野命詔八雲立出雲國者狹布之稚國在哉初國小所作故將作縫詔而栲衾志羅紀乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女胸鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穗振別而三自之綱打挂而縞黑葛閉々那々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫

オウトナヅクルユエハクニヒキマセルヤツカミヅオミツヌノミコトノノリタマハクヤクモタツイヅモノクニハサヌノワカクニナルカモハツクニチヒサクックラセリカレツクリヌハムトノリタマヒテタクブスマシラキノミサキヲクニノアマリアリヤトミレバクニノアマリアリヤトノリタマヒテヲトメノムナスキトラシテオホヲノキダツキワケテハナスキトラシテオホヲノキダツキワケテハタスヽキホフリワケテミツヨリノツナウチカケテシモツヽラヘナヘナニカハフネノモ

國者自去豆乃打絶而八穂爾支豆支乃御埼也此而堅立加志者石見國與出雲國之堺有名佐比賣山是也亦持引網者薗之長濱是也亦北門佐伎之國矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女冐鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穂振別而三自之綱打挂而霜黑葛閉々那々爾々呂々爾々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自手縫之打絶而闇見之國是也亦高志之都々乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女冐鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穂振別而三自之綱打挂而霜黑葛閉々那々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者三穂之埼也持引網者夜見島是也固堅立加志者有伯耆國大神岳是也今者國引訖詔而意宇杜爾御

ソロモソロニクニコクニコトヒキキヌヘルクニハコヅノウチタエヨリシテヤホニキツキノミサキナリガクテカタメタテシカシハイハミノクニトイヅモノクニトノサカヒナルナハサヒメヤマコレナリマタモチヒケルツナハソノノナガハマコレナリマタキタドサキノクニヲクニノアマリアリヤトミレバ、クニノアマリアリトノリタマヒテヲトメノムナスキトラシテオホヲノキダツキワケテハタスヽキホフリワケテミツヨリノツナウチカケテシモツバラヘナヘナニカハフネノモソロモソロニクニコクニコトヒキキヌヘルクニハタユヒノウチタエヨリシテクラミノクニコレナリマタコシノツヽノミサキヲクニノアマリアリヤトミレバクニノアマリアリトノリタマヒテヲトメノムナスキトラシテオホヲノキダツ、キワケテハタスヽキホフリワケテミツヨリノツナウチカケテシモツバラヘナヘナニカハフネノモソロモソロニクニコクニコトヒキキヌヘルクニハミホノサキナリモチヒクツナハヨミシマコレナリカタメタテシカシハハヽキノクニナルオホカミノタケコレナ

別而波多須々支穂振別而三自之綱打挂而霜黑葛閉々那々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自手縫之打絶而闇見之國是也亦高志之都々乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女冐鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穂振別而三自之綱打挂而霜黑葛閉々那々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者三穂之埼也持引網者夜見島是也固堅立加志者有伯耆國大神岳是也今者國引訖詔而意宇杜爾御

林衡立而意惠登詔故云意宇

リイマハクニヒキヲヘヌトソリタマヒテオ
フノモリミニツエツキタテテオエトノリタ
マヒキカレオウドイフ

其の頃、また氏文といふものあり。一家族の歷史ともいふべきものにて、祖先の功業及び家系を錄したり。其の書き方は、漢文に國語の假字を混用し、別に助辭を細字もて錄したるなど、恰も『古事記』の文と宣命書とを兼ねたる如し。氏文の中、今日に傳はるは獨り高橋氏文あるのみにて、餘は悉く散逸しぬ。高橋氏文は、其の祖先たる磐鹿六猪命の事蹟を始め、其の裔孫の世々膳部の職を奉仕せし由來、さては若狹國を領したる事などを錄したるものなり。其の文古雅にして當時の風にかなへり。

第參編　平安時代の文學

第壹章　總論

平安時代とは、桓武天皇延曆十三年に都を平安に奠め給ひし時より、後鳥羽天皇の御宇文治二年に將軍源頼朝覇府を鎌倉に開きて政權全く武門に歸せし頃までをいふ。其の間およそ三十二代四百餘年なり。

此の時代の初には、歷代の天皇意を用ゐて漢學を奬勵し、朝紳はまた私學館を設けて子弟の教養を務めければ、斯學の隆盛は殆ど其の頂點に達したりき。されば、當時詩文を能くせしもの少からず。都良香・菅原道眞・三善清行・小野篁・僧空海等殊に名高く、著書も亦多かり。漢文にて綴れる勅撰の歷史には『續日本紀』『日本後紀』『續日本後紀』『文德實錄』『三代實錄』

等あり、『日本書紀』に加へて本朝六國史と稱せらるゝもの、史學上重要の書なり。其の他、詩文集にては『凌雲集』『文華秀麗集』『經國集』『本朝文粹』『朝野群載』『菅家文草』等名高く、其の他『古語拾遺』『大同本紀』『弘仁格式』『新撰姓氏錄』『令義解』『貞觀格式』『延喜格式』等の撰述あり。然るに、醍醐天皇の頃に至り、遣唐使廢せられて、漢學稍衰微の兆あるに及びて、國文學代りて興り、物語・草子・日記・紀行等の如き各種の散文あらはれ、今樣・神樂・催馬樂等の如き異樣なる歌謳も出でたり。而して、是等は大方貴紳若しくは宮媛の手に成りしのみならず、浮華驕奢なる當世の感化を承けたれば、艶麗優美の姿を有して、雄渾壯大の氣力に乏し。故に、此の期の文學を以て奈良時代のに比すれば、彼は男子の征矢を手挾みて秋風に吟ずる如く、是れは上臈の朱欄に倚りて春月に對するに似たり。漢學及び佛敎の思想が、漸く我が固有の思想と調和して、此の文學の內容を豐富ならしめし事は言を待たず。

言語は、また奈良時代の後を承け、漢學・佛敎の流行につれて、外國語の混交漸く多きを致せり。すなはち、本期にありては、其の輸入せられしもの啻に從來の如く體言等の止むを得ざるものゝみならず、活用言等までも其の儘に使用せらるゝあり。是等は、孰れも其の音韻の我が國語に調和すべきかぎりを採りたること勿論なりしが、其の輸入愈多くなるに從ひ、此方よりも亦調和すべき必要ありて、自然に國語の音韻若しくは組織の上に多少の變化を生ずるに至りぬ。今是等の變化によりて生じたる國語の性質を考察するに、質朴にして强きは、すべて流麗にして弱きに變りたるが如し。されば、是等の言語を以て綴りたる文章の、妖艶の姿に富めり

しも亦理ならずや。本期に見えたるかぎりにても、早きと後れたるとは此の差別またきはやかなり。

文字は、奈良時代の末葉に片假名の發明ありしこと既に前に述べたり。然るに、此の期の初に至りて、また平假名作出せられぬ。是は元來漢字の草體より脱化せしものなるが、嵯峨天皇の頃僧空海が「いろは」歌を作るに至りて始めて一定せり。然れども、此の二種の文字が文學上に實際の效果をあらはしゝは、醍醐天皇の以後にあり。從來我が國文學は漢字を借りて國語を寫〻たるものゝみなりしが、今や全く假名のみの文章をも見るに至りぬ。漢字を聲字として國語を寫したるに比すれば、眞に一大進歩と謂ふべし。かゝれば、諷唱すべき歌謳が奈良時代の文學を支配し、筆記すべき散文が此の時代の文學を占領したる所以も明瞭ならむ。是れより我

が國の文字は永く漢字と共に此の二種の假名を用ゐることゝなれり。

第貳章　歌謳

第壹節　總說

當期の初つ方およそ七八十年の間は、漢文學極盛の時期にして、殊に嵯峨天皇の御宇などには、大學ある紀傳道の學生等が科試にも、專ら詩賦を以て及第仕官せしむる程なりしかば、上下を擧げて詩を賦し〻漢文を屬することのみ熾に行はれぬ。然れども、かゝる中にも、反動の曙光は早く清和天皇の朝より漸く現はれつゝ、一時和歌の再燃は詩賦の流行と拮抗の勢を呈せ〻が、漢文學の衰微につれて遂に和歌復興

の機運に會しぬ。此の機運に先驅せし俊秀なる歌人を僧遍照・文屋康秀・僧喜撰・小野小町・在原業平・大伴黒主等とす。是等は孰れも『古今集』の序文中に載せられて、世に六歌仙と稱せらるゝ人々なり、宇多天皇の寛平の頃よりは此の機運ます〳〵熟し、公卿宮媛の間には歌合といふもの頻に行はれたり。是は歌人等相集りて、題を設け思を構へて即吟し、其の作歌の詞思を評隲〳〵て優劣を批判するものなり。されば、此の頃より詠歌の盛行したるは勿論の事なれど、かゝる遊戯的諷詠の行はるゝに從ひ、其の風調は景情に觸れて美感を歌へる從來の歌謳に比して、いたく異樣のものとなりぬ。此の際、また長歌衰へて短歌のみ獨り榮ゆるに至れり。而して、長歌の稀に詠出せられたるものを見るに、打見たるところのみは、從來の形を存して五音・七音の句を聯ねたれど、實際

には七五の句調を帶ぶるもの多し。短歌は、さすがに句を練り思を構へて巧を競ひたる程ありて、藝術としては明かに一歩を進めたれど、古歌の雄渾眞摯なるには似で、輕佻浮靡の風あり。即ち、其の句法の婉曲にして纖細なるに引きかへ、率直人を動かすの妙に乏し。蓋し、美感中に動かざるに、强ひて詞を擇り句を尋ねて詠出したるに依るあらむ。

さて、醍醐天皇の朝よりは和歌一層盛に行はれ、巨匠名人の輩出夥しかりしが、天皇亦深く意を此の道に注がせ給ひて、『古今和歌集』を撰ばしめ給へり。是れ勅撰和歌集の濫觴にして、和歌奬勵の道はた是れより開けぬ。村上天皇の御代には和歌所を禁中の梨壺に設け、時の歌人をして『萬葉集』の訓點を附せしめ、また『後撰和歌集』を撰ばしめ給へり。以後、本期間に勅撰歌集の撰進せられしもの五部あり是等に、鎌

倉時代より室町時代にかけて出でたる十四種の撰集を併せて、二十一代集といふ。此の外、當期中には私撰の歌集も亦尠からず。紀貫之の『新撰和歌集』、藤原清輔の『續詞華集』、藤原公任の『金玉集』、能因法師の『玄々集』等殊に名高し。また、家々の歌集にては、在原業平・素性法師・凡河内躬恒・藤原敏行・紀貫之・壬生忠岑・大中臣能宣・清原元輔・紫式部・清少納言等の家集今に傳はれり。

かく和歌の盛行するに從ひて、歌体も漸く多く、旋頭歌及び連歌等は本期の初には只物語若しくは草子類の中に散見するに過ぎざりしも、後には勅撰の歌集に掲載せらるゝに至りぬ。當時、連歌は坐興の頓作を旨とせしからに、漢吳の音をも俗語をも憚からず用ゐたり。また、今樣の歌といふものも、此の時代より見えしが、僧空海の「いろは」歌は蓋し此の種

のものゝ嚆矢なるべしといふ。今樣とは、既に其の名目の標致する如く、姿も詞も共に古に泥まぬ歌といふ意にて、七・五音の句四節より成り、是れはた時俗の言語をも漢吳の音をも嫌ふことなく、梵語をさへ其のまゝに混用したるものあり。其の他、神祇を祭る神樂歌あり、俗謠を唐樂の音節に合して謳ひし催馬樂あり、詩賦に曲節を附して吟誦する朗詠といふもありき。但し、是等の中には純然たる歌謳の體を脫して歌曲に屬すべきものあり。催馬樂・朗詠・今樣等は現に總稱して郢曲とも又唱歌とも呼べり。かゝれば、歌はます〳〵進みたるに似たれども、其の實末技に流れて名歌次第に減じ、大方巧緻纖細の風あるを以て最上なるものと心得るに至れり。殊に、此の時代の中頃より、詠歌を敎ふる書冊出で、各自門戸を立てゝ一定の方式を守株するに及びては、摸型に從

ひて作爲する外何事も知らざる、一種の機械的技術に過ぎざる有樣となりぬ。藤原清輔の『奥儀抄』『袋草子』及び『和歌初學抄』、藤原基俊の『悅目抄』、藤原公任の『新撰髓腦』等は、孰れも本期の歌風を制裁して力ありし書典なり。

第貳節　『古今和歌集』

『古今和歌集』は、醍醐天皇の延喜五年四月に、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等に仰せて撰ばしめ給ひたるものなり。此の集は、『萬葉集』に入らざる古歌及び編者等の自詠を網羅して、其の卷二十、春・夏・秋・冬・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・長歌・旋頭歌・俳諧歌・大歌所等の部門に分ち、歌の數は千百首に滿ちたり。此の集の中には、漢學佛敎の影響を受けて、其の思想を表現せし歌甚だ少からず。此は、既に本期文學の大勢を知

れるものに向ひては、殊更に其の然る所以を絮說する要なからむ。たゞ茲に注意せざるべからざるは、『萬葉集』に在りては、是等の思想を詠ぜしもの、大方直譯めきて露骨なるを免れざりしに、此の集にありては、能く其の意を飜して斧鑿の痕跡を止めざること是れなり。また、『萬葉集』をして稍形式的にらしめたる敬神・忠君の念の如き、此の集にては、流れたる觀ありといへども、其の鬱勃たる氣慨はなほ尋ぬることを得べし。さて此の集にて最も多き歌は、雪月花等の自然美を詠ぜるもの、若しくは男女相思の情を抒べたるものなり。而して、其の自然美を歌へるもの、多數は、怡樂の調を帶ぶるものから、花を見て人生の果敢なきを嘆ち、月を見て無常の感を寄するが如きものあるは、即ち、佛敎思想の影響ならむ。此の集の着想が『萬葉集』のに比べて緻密複雜とな

り、歌語が優美艶麗に赴きしことは、前に云へるが如し。長歌の此の集に載れるもの僅に五首にして、剩へ其の詞思の蕪雜なるは、亦特に注意すべきとなり。

此の集に見えたる歌人の數は甚だ多し。彼の六歌仙をはじめ、在原行平・素性法師・藤原敏行・大江千里・清原深養父・伊勢、さては紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等は其の主なるものにして、業平と貫之とは特に逸群と稱せらる。

在原業平(一四八五―一五四〇)は、嵯峨天皇の皇子阿保親王の第五子にて、母は桓武天皇の皇女伊登内親王なりき。天長三年父親王の奏請によりて、兄の行平と共に在原朝臣の姓を賜はりて、人臣の列に降りぬ。官に仕へて近衛權中將たりしかば、世に在五中將と呼べり。業平容姿頗る閑雅、壯時は放縱にして操行脩らざりき。或は云ふ、當時藤原氏の驕慢甚し

かりしを憂憤して此に出でたるありと。其の歌は餘韻深くして流麗なるを以て名あり。然れども、浮麗なるもの多く、壯絶の感あるもの少し。纖巧浮靡は當時の社會に浸染したる氣風なりとはいへ、女性の詠すら猶ほ率直雄大の風を帶べりし奈良時代の歌に比して、著き相違あるを見るべし。

紀貫之(一五四二―一六〇六)は歌人望行の子にして、碩學長谷雄の孫なりき。延喜年中、御書所預・越前權少掾・內膳典膳・少內記等の諸官を經て大內記に轉じ、從五位下に敘せられ、又加賀並に美濃介等に任ぜられぬ。延長中大監物・右京亮等を拜し、尋いで土佐守となり、承平中任滿ちて京に歸りぬ。天慶中玄蕃頭となり、從五位に進み、又木工權頭に遷り、從四位下に敘せられたり。延喜五年四月勅を奉じて友則・躬恒・忠岑等と共に『古今集』を撰せるよしは、既に讀者の了知する所な

るべし。此の外、貫之の撰せる書に『萬葉鈔』『新撰和歌集』『土佐日記』等あり。家集を『貫之家集』といふ。貫之は漢學に通じ、併せて治民の術・將帥の才にも長ぜしが、文壇に於ける功勞は夐に是等に優りたり。即ち、散文に假名文の一躰を創始して、將來に於ける斯文の發達を導き、歌謳に『古今集』の編纂を擔當して、既往幾十年の衰微を興し、共に千古の偉業と謂ふべし。貫之の歌は格調流麗にして變化に富むのみならず、直率至誠の情中に籠りて、誦者の同感を誘發する妙あり。蓋し、人麿・赤人以來の名手なり。散文に就きては『土佐日記』並に『古今集』の序最も名高し。

題しらず　在原業平

○大方は　月をもめでじ　これぞこの　つもれば人の　わいとなるもの

二條の后の宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたを書けりけるを題にてよめる

ちはやぶる　神代もきかず　龍田川　からくれなゐに　水くゝるとは

題しらず　同　小野小町

○いろみえで　うつろふものは　世の中の　人の心の　花にぞありける

題しらず　僧正遍照

○末のつゆ　本のしづくや　世の中の　おくれさきだつ　ためしなるらむ

題しらず　在原行平

○はるのきる　霞のころも　ぬきを薄み　山風にこそ　みだるべらなれ

三條の東宮の御息所ときこえける時、正月三日御前に召して仰せことある間に、日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるをよませ給ひける　文屋康秀

春の日の　光にあたる　われなれや　かしらの雪と　なるぞわびしき

題しらず　大伴黒主

◎春さめの　ふるはなみだか　さくら花　ちるを惜まぬ　人しなければ

題しらず　喜撰法師

○わがやどば　都のたつみ　しかぞすむ　世をうぢ山と　人はいふなり
　是貞の親王の歌合によめる　藤原敏行

○白つゆの　色は一つを　いかにして　秋の木の葉の　千々にそむらむ
　櫻の花の散り侍りけるを見て　素性法師

○花ちらす　風のやどりは　たれかしる　我にをしへよ　行きて恨みむ
　雪の降れるを見てよめる　紀友則

雪降れば　木ごとに花ぞ　咲きにける　いづれを梅と　わきて折らまし
　題しらず　凡河内躬恒

吉野川　よしや人こそ　つらからめ　はやくいひてし　ことは忘れじ
　ながつきのつごもりの日よめる　同人

○道知らば　たづねても行かむ　もみぢ葉を　ぬさと手向けて　秋は往にけり
　家を賣りてよめる　伊勢

○あすか川　淵にもあらぬ　わが宿も　瀬にかはり行く　ものにぞありける
　歌奉れと仰せられし時によみて奉れる　紀貫之

○さくら花　咲きにけらしな　あしびきの　山のかひより　見ゆる白雲

　延喜の御時歌合しける　同人

○はるがすみ　たなびきにけり　ひさかたの　月の桂も　花やさくらむ
　八月駒迎　同人

あふさかの　關のしみづに　かげ見えて　今や引くらむ　望月のこま

第參節　『古今集』以後の勅撰歌集

『古今集』の成りて後四十六年を經て、村上天皇の天暦五年十月に、新に成れる歌集を『後撰和歌集』といふ。是は源順・大中臣能宣・清原元輔・坂上望城等五人を禁中の昭陽舍梨壺に召されて、『萬葉集』の訓點を考覈せしめ給ひし序に撰ばしめ給ひたるなり。此の集は、『古今』時代幷に其の以後の歌を載せたれど、尙ほ上代に溯りて古歌を採れるもあり。卷の數は總じて二十、部門の類別大方『古今集』におなじく、只異なるは物名・長歌・旋頭歌・俳諧歌・大歌所の數項を缺けるのみ。此

の集以下の撰集皆之と大同小異なり。集中の主なる歌人は、『古今集』に見えたること殆ど相同じけれども、此の集は歌の姿を問はずして其の心をのみ重んじたるが故に、『古今集』の姿情共に兼備せるに比しては劣りぬべし。『後撰集』と其の撰擇の方針全く相反して、而も『古今集』に及ばざるを『拾遺集』とす。

『拾遺和歌集』は一條天皇の長德年中に藤原公任の撰せるなりとも、或は花山法皇の御撰なりともいへり。此の集は純ら前の二集に入らざる歌を採りたれども、『後撰集』より幾程も經ざりしかば、其の撰擇精しからずして、玉石同架の趣あり。加之、姿を先とせるが故に、意義膚淺にして搖曳の致を欠けり。『古今』『後撰』の二集に『拾遺集』を加へて『三代和歌集』といふ。後世歌を作るもの以て重寶とす。

此の集撰ばれてのち九十餘年にして、白河天皇の應德三年九月藤原通俊詔を奉じて『後拾遺和歌集』を上りぬ。此の集の歌人には大中臣能宣・源順・清原元輔・藤原公任・源經信・能因法師・赤染衛門・紫式部・和泉式部・清少納言等の名人少からず。其の歌の風は、次第に古調を離れて纖細卑俗に陷り、輕浮なるもの多し。『後拾遺』の後四十年を經て、崇德天皇の天治元年、源俊頼白河法皇の院宣を以て『金葉和歌集』を撰び、又二十餘年を經て、近衛天皇の仁平年中、藤原顯輔『詞華集』を上り、又四十二年を經て、後鳥羽天皇の文治三年藤原俊成後白河法皇の命によりて『千載集』を撰びぬ。『金葉』『詞華』の二集は後拾遺体の卑俗淺近を嫌ひ、稍古體の高調を慕ひしも、猶ほ全く纖細巧緻を脱すること能はず、只管詞姿の面白からむことを求めしからに、往々俳諧歌めきたるものあり。『千載

集』の歌はた詞姿を重んじたれども、餘情の綿々たゝて雅趣の深邃なるものあるは、さすがに俊成の撰なればにやあらむ。更に『古今集』以後の歌集を比較すれば、『後撰』は質に富みて文に乏しく、『拾遺』は華に過ぎて實に及ばず、又『後拾遺』は卑俗にして、『金葉』『詞華』は纖巧に流れたり。ひとり『千載集』は文質中を得たるに近し。

『古今集』以後歷代の歌集に其の名を列ねたる歌人にして、特に其の名を擧げて史上に錄すべきは、只僅に大中臣能宣・源順・清原元輔・藤原公任・源經信・源俊賴・藤原顯輔・同基俊・同俊成・和泉式部・赤染衞門・相模・大貳三位等の十數人あるのみ。こゝには特に往昔より人口に膾炙せる公任・俊賴及び俊成の三人を傳へむとす。

藤原公任(一六二七―一七〇一)は、小野宮太政大臣實賴の孫

なり。天元三年清涼殿にて元服を行ひし時、天皇躬ら冠を授け給ひて正四位に敍し、侍從に任ぜられしが、後累進して大納言となりぬ。世に四條大納言といふ。姿性聰明にして、學は和漢を兼ね、諸藝一として殆ど通ぜざるなし。和歌及び筆跡は特に其の長技として世上に喧傳す。其の詠歌は、風姿優婉にして、着想の奇なる中に楚々たる風韵あるが、此の人の得意とするところなり。著書に『北山鈔』『和漢朗詠集』『和漢九品論議』『新撰髓腦』『金玉集』『三十六人歌合』等あり。家集を『公任卿集』といふ。長久二年正月一日、齡七十六にて薨じぬ。

源俊賴(一七七〇前後)は、公任と時代を同じうしたる經信の第三子なり。堀河・鳥羽・崇德の三帝に歷仕し、右近衞少將に任ぜられ、木工權頭・右京大夫を兼ね、從四位上に敍せられぬ。其の歌を詠ずるには、沈思熟考反覆改竄してのち、初めて人に

示したりといふ。着想嶄新、詞姿頗る溫雅なり。其の著すところ『山木髓腦』『無名鈔』『俊賴口傳』あり。家集を『散木棄歌集』といふ。生歿の年月詳かならず。

藤原俊成(一七七三―一八六四)は、御堂關白道長が四世の孫なり。仁安三年正月正三位に敘せられ、承安二年二月皇太皇宮大夫となり、安元二年九月六十二歳にして髮を削りて釋阿と號せり。俊成はじめは六條顯輔に養はれ、顯廣と名乘りて和歌を學びしが、六條家の風體に慊らず、去りて基俊に就きぬ。其の格調自然にして雅健、其の旨遠く、詞姿圓熟して、粗笨の風なし。後鳥羽天皇深く俊成を愛し給ひて、終に和歌所の所領を賜ひ、且つ子孫をして永く相襲がしめき。後世の所謂師範家の祖なり。著書に『古來風躰抄』あり、我が邦古來歌體の變遷を論じたるものあり。家集を『長秋詠草』といふ。元

久元年十一月三十日、九十一歳の高齢を以て薨ぜり。

左に『古今集』以後なる諸歌集中より例を掲ぐ。

月の面白かりける夜、花を見て　源　信明

あたら夜の　月と花とを　おなじくは　心知れらむ　人に見せばや

八月十五夜　藤原雅正

いつとても　月見ぬ秋は　なきものを　わきて今宵の　めづらしきかな

人の許より歸りて遣はしける　紀　貫之

あかつきの　なからましかば　白露の　おきてわびしき　別れせましや

かへし　讀人しらず

おきて行く　人のこゝろを　しら露の　われこそまづは　思ひきえぬれ

屏風に八月十五夜油ある家に人遊びたる所　源　順

水の面に　てる月なみを　數ふれば　こよひぞ秋の　最中なりける

題しらず　大中臣能宣

紅葉せぬ　ときはの山は　吹く風の　おとにや秋を　きゝわたるらむ

清愼公五十賀し侍りける時の屏風に　清原元輔

青柳の　みどりの糸を　くりかへし　いくらばかりの　春を經ぬらむ

早苗をよめる　曾根好忠

みたやもり　けふはさ月に　なりにけり　急げや早苗　おいもこそすれ

宇治前太政大臣家に、三十講の後、歌合し待りけるに、　相模

五月雨をよめる

五月雨は　みづのみ牧の　まこも草　かりほすひまも　あらじとぞ思ふ

題しらず　能因法師

ひとへなる　蟬の羽衣　夏はなは　うすしといへど　あつくぞありける

題しらず　紫式部

世の中を　なになげかまし　山ざくら　花見るほどの　こゝろなりせば

待郭公といへる事をよませ給へる　崇德院

郭公　まづにかゝりて　あかすかな　ふぢの花とや　人は見るらむ

薄　源俊頼

うづら鳴く　まのゝ入江の　はま風に　をばななみよる　秋の夕ぐれ

京極前太政大臣家の歌合によめる　源頼綱

秋の夜の　月にこゝろの　ひまぞなき　いづるをまつと　入るを惜むと

新院の御前にて花契遐年といへる事をよめる　藤原顯輔

よろづ代に　見るべき花の　色なれど　けふのにほひの　いつか忘れむ

水邊納涼といへることを　藤藤家經

風吹けば　川邊すゝしく　よる浪の　立ちかへるべき　心こそせね

月のあかゝりける夜まうで來たりける男の、立ちながら歸りにければ、朝にいひ遣はしける　和泉式部

涙さへ　いでにしかたを　ながめつゝ　こゝろにもあらぬ　月を見しかな

堀河院の御時、百首歌奉りける時、早蕨を　藤原基俊

みやま木の　かげのの下の　下わらび　もえいづれども　知る人もなし

攝政太政大臣家五十首歌よみ侍りけるに　藤原俊成

ゆふされば　野邊の秋風　身にしみて　うづらなくなり　深草のさと

九月雨　同人

暮れはつる　夕の空を　ながむれば　くもこそ秋の　なごりなりけれ

故郷花　平忠度

さゝなみや　しがの都は　あれにしを　むかしながらの　山ざくらかな

第參章　散文

第壹節　總說

此の期の初葉に於ける漢文學の流行は、散文の上にも影響して、祝詞・宣命の如きも、次第に國文の格を離るゝに至りしが、其の後漢學の奬勵止み、假名文字の便利承認せらるゝに及びて、假名書きの文章世に出づることゝなりぬ。蓋し、日用の記簿などには早くより假名もて錄する事も行はれたらむと思はるれど、始めて文章の體裁を備へて世に公にせら

れ、現に今日にも傳はれるは、『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』の序及び『土佐日記』等なり。是等は、大方清和天皇以後、醍醐天皇の朝に至る間に出でたるものなれば、恰も歌謳の再興と其の時期を同じうするものなり。かくて、諸種の物語相踵ぎて世に出でしが、其の中今に遺れるものには、『空穗物語』『落窪物語』等あり。孰れも、想像を馳せ意匠を凝らして架空の事實を構成し、純ら快樂を讀者に與へむがために作れる小說なり。されば、從來專ら實用をのみ目的とせし散文も、今や美術的方面に其の領域を擴めむとす。誠に一大進歩と謂ふべし。此の頃、又『蜻蛉日記』といふもの出でたり。消息文も、また此の頃より漢文體の書牘と並びて假名文のもの行はれ始めぬ。是は云ふまでもなく實用一遍のものなるべき筈なりしかど、多くは和歌の序詞めきたる文躰にて、文學的

趣味を帶びたり。其の後、數世を經て一條天皇の御宇よりは、未曾有の發達散文の上に見え、名流大家蔚然として起りぬ。作者には紫式部・清少納言を始として、和泉式部・讃岐典侍・源隆國・藤原爲業・中山忠親等あらはれ、著書には『源氏物語』『枕草子』に亞いで、『濱松中納言物語』『堤中納言物語』『狹衣』『唐物語』『宇治大納言物語』『宇治拾遺物語』『榮花物語』『大鏡』『今鏡』『紫式部日記』『和泉式部日記』『更科日記』、及び『拾遺』『後拾遺』『金葉』『詞華』諸歌集の序等出でたり。

平安時代は、かくの如く諸種の散文一時に發達して、各其の榮を極めたりしかば、奈良の和歌時代に對して散文時代の稱あり。今日單に和文とし云へば、殆ど此の期の製作にかぎれるが如き觀あるにても、其の文學が特に散文に秀でたりしを知るに足るべし。さて、其の時代の散文が、漢學若しくは

佛教思想の影響を蒙りしことは、云ふまでもなからむ。但し、散文中の傑作と稱せらるゝものが大方婦人の手に成りしこと、特筆すべき件なりとす。文章は歌謳の上にいへりしが如く、亦纖細巧緻を貴びて、艶麗優美なるもの多かり。今、此の時代の散文を敘說するに當りては、其の性質・體裁より分類して、物語・歌序・日記及び紀行・草子・雜史の五種に分たむ。

第貳節　物語

物語とは、元來話說の義なれども、今や書冊に編まれて純然たる記載物の稱となりぬ。物語に小說的なると史的なるとの二種あり。小說的物語の中にて最も古きを『竹取物語』とす。此の書は延喜の後久しからざる程に成りしものと傳へたれど、作者は詳かならず。皇族・大臣などいふやんごとなき

人々が月界より下りし一美女を娶らむとて、痴情に驅らるゝ狀を寫せる滑稽小說にして、間々事件を漢籍及び佛敎中の記事に借る。章句の簡單なる點は、祝詞・宣命の俤ありて、おのづから古文の趣を具へたり。

『竹取』に次ぎて、『伊勢物語』出でぬ。『伊勢物語』の作者は、伊勢の御ありといひ、或は在原業平なりともいふ。此の書は物語の名ありと雖も、全篇を通徹したる脚色あるにあらず、和歌の序詞めきたる文章もて簡短なる事件を數多集錄したるものにして、每章必ず一首若しくは數首の歌を以て之を結べり。卷中の事件は、大方業平の閱歷めきたれど、虛實を錯へ前後を序せず、專ら戀愛のことにかゝりぬ。文章の簡潔・遒强にして餘情に富むこと、古文中、恐らくは此の右に出づるものなからむ。後に出でたる『大和物語』は全く此の書の體に

倣へるなり。『伊勢物語』に次ぎて世に出でたりといひ傳ふるは、『住吉物語』と『宇津保物語』となり。二書共に、著者も年代も詳かならず。今世に存する『住吉物語』は、全く後人の僞作にかゝれりとぞ。『落窪物語』『濱松中納言物語』『堤中納言物語』等の出でたるも、亦此の頃の前後なり。此の中、『堤中納言物語』は、滑稽を主として趣味ある書なれど、今世に存するは錯脫多くして文意の通じがたきところあり。

要するに、此の頃の物語には、文章の外に未だ精細なる攻究を値するものなかりき。然れども、我が邦の小說はかゝる狀態より發したりと思へば、決して輕々に看過すべきにあらず。況や、今日までも有數の大傑作として公認せらるゝ『源氏物語』は、かゝる搖籃中に生長したるものなりしをや。『源氏物語』の著者は紫式部なり。

紫式部(一六五〇前後)は藤原爲時の女にして、藤原宣孝の室なりき。式部が幼時の敎育は如何なりしか詳かならねど、父爲時は菅原文時が高足の弟子にして、漢學に精通し、兼ねて作歌にも秀で、兄惟規・伯父藤原爲賴等はた歌を以て名あり し者なれば、自ら其の誘掖感化を蒙りたるを察すべし。資性穎敏にして强記、甚だ學問を嗜みたり。長ずるに及びては博覽衆に超え、我が邦の物語・日記・歌集の類は更なり、經史・佛乘の遠きより婦學・細藝の近きに至るまで、一も通曉せざるなかりき。おもふに、彼が後年の傑作は天稟の才に依れるは勿論なりと雖も、這般の造詣又幾多の詩材を供せしこと疑無し。加之、式部は單に典籍によりて居ながら其の識を養ふを務めたるのみならず、名勝古跡を歷遊して其の詩囊を豐富にするを力めたり。紫式部はかくの如く素養ありて

才藻衆に勝れたりきと雖も、當時の士女が浮靡荒蕩なりしに似ず、謹愼して事を奉じ、謙遜して人に接するを常とせり。かゝれば、式部は夫宣孝に仕へても、貞淑にして婦道を盡したりしことと知るべきのみ、長保三年四月宣孝逝きての後は、其の女と共に寡居して、風月の樂みに悲愁の情を遣りぬ。其の後寛弘二三年の頃より、一條院の中宮上東門院彰子に仕へて、侍講おゝ務めたることあり。式部が生誕・終焉の年月は詳かならず。二女あり。長は賢子、世に大貳三位と稱す。『狹衣』の作者なり。次は辨局といへり。

紫式部が『源氏物語』を著はしゝ時代に關しては、臆說種々あれども、最も信憑すべき學者の推定には、長保の末、寛弘のはじめ、式部が寡居して私第にありける頃ならむといふ。此の物語は、其の主人公たる源氏の君と其の子薫大將とが宮

中の生涯を敍せるものにて、帝王三代の間に亘り、全篇すべて五十四帖より成れり。桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花の宴・葵・榊・花散里・須磨・明石・澪標・蓬生・關屋・繪合・松風・薄雲・朝顔・少女・玉かつら・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・御幸・藤袴・横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻・雲がくれ・匂宮・紅梅・竹川・橋姫・椎の本・總角・早蕨・やどり木・東屋・浮舟・かげろふ・手習・夢の浮橋等即ち是れなり。此の中雲隱の卷は名のみにて文なし。今世別に雲隱の卷と稱するものあれど、全く後人の假作にすぎず。山路の露と、夢の浮橋の末にあるも亦おなじ。

かくの如く、『源氏物語』は、全篇五十四帖を以て成りぬと雖も、大體よりいふときは、其の結構三段に分かるべし。即ち、前なる四十四帖は專ら光源氏の君と紫の上とを骨子として、之に許多の人物と事變とを配合し、後の十帖は其の子薫大

將及び匂宮を以て男主人公とし、之に大姫君・中君・浮舟の三女を配し、また若干の人物・事件を錯出して敍事の變化を務めたり。故に、古來後の十帖をば別に『宇治十帖』ともいへり。前なる四十四帖の中に見えたる人物は、其の性情・特質率ね中庸にして、善惡共に極端なるものなし。固より、時に隆替あり、事に起伏あり、人はた盛衰浮沈なきにあらずと雖も、打まかせて云へば、諸の美性才能を兼備したる王孫公子が、壯麗なる平安城裡に泰平を謳ひ風流を盡して、豪奢放縱たる癡狂を事とし、幸多き天運の行路を過ぎゆくのみ。然るに、宇治十帖はいたく之と趣かはりて、其の主人公の運命稍悲劇の素を有し、懊惱あり、苦悶あり、愁傷嗟歎の聲往々紙上に溢れむとせり。

さて、此の物語は、此の如く前後其の趣を異にせりと雖も、其

の人物の性行、事件の變替、景象の配合等、共に能く統一を保ちて、自然の趣致あること、彼此相同じ。古來世の評釋家、或は『源語』をさして誨淫の書となし、或は諷諭の文となすものあるは、たま〳〵其の現ずる天地の大にして自然なるを證明するものにあらざるか。此の物語の採りたる材料は悉く當時の社會にありしものから、尙ほ篇中の旨とある人物は、孰れも、式部の理想より產れ出でたるものなり。

其の文章の典雅流麗なるは、國文學中其の匹を見ざる所、之を以て情を寫し景を敍し事を論ずるに、一として其の法を具へ其の妙を究めざるなし。就中、優美溫柔の情操若しくは景象を描ける章は、ひとへに議論を旨としたる文よりも、一層の妙趣多きを覺ゆ。おもふに、優美なるは和文の長所にして、溫柔なるは式部の特質たりしに基くべし。山水風月の景

を細敍せる趣の、時としては花やかに、時としては物さびしく、又哀別離苦の情緒を精寫せる次第の、或は句ごとに涙あるを覺えしめ、或は章毎に嗟嘆の聲を感ぜしむるなど、最も作者の技倆顯著なる所なるべし。

『源氏物語』の外、式部になほ一の著書ありて、『紫式部日記』といふ。また、『紫式部家集』といふは其の詠じおける和歌を集めたるものなり。

紫式部が世を去りて後は小說的物語の製作俄に頓挫して、只其の子の大貳三位が著したる『狹衣物語』と作者未詳なる『とりかへばや物語』との二篇あるのみ。しかも、是等は大作『源氏物語』を見來たりし眼には、とかくの批判を下すべき程の價値を認むること能はず。此の期の末と覺しき頃に、『唐物語』と題する書出でたり。此は支那の話說數十項を國文に

意譯したるものにて、毎項の末に和歌一首を掲ぐ。歌文共に力あり。亦一奇書とすべし。其の作者は明かならず。

燕の子安貝（『竹取物語』）

日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕巣作れり。くらつ麿申すやうに尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巣に手をさし入れさせて探るに、物もなしと申すに、中納言悪しく探くれば なきなりと腹立ちて、誰ばかりおぼえむにとて、われ上りて探らむと宣ひて、籠にのりて上りて、窺ひ給へるに、燕尾をさゝげていたく廻るに合せて、手をさゝげて探り給ふに、手にひらめけるものさはる時に、われ物握りたり。今はおろしてよ。翁しえたりと宣ひて、集りてとくれろさむとて、綱を引きすぐして綱絶ゆる、即ちやしまの鼎の上にのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにて伏し給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていき出で給へる、また鼎の上より手と足とりしてさげれろし奉る。からうじて、御心地いかゞおぼさると問へば、息の下にて、ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと

握りもたれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來。此の貝顏みむと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける古糞を握り給へるなりけり。それを見給ひて、おなかひなのわざやと宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしといひける。

水無瀨の逍遙（『伊勢物語』）

昔、惟喬のみこと申す御子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ處に宮ありけり。年ごとの花盛には、其の宮へなむれはしましける。その時右の馬の頭なりける人を常に率ておはしましけり。時世經て久しくなりにければ、其の人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで、酒を飲みつゝやまと歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻殊におもしろし。其の木のもとにおりゐて、枝を折りてかざしにさして、上中下も皆歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる、

世の中に　たえて櫻の　さかざらば　春のこころは　のどけからまし

となむよみたりける。又、人の歌

散ればこそ　いとゞ櫻は　めでたけれ　うき世になにか　久しかるべき

とて、其の木のもとは立ちてかへる北、日暮になりぬ。御供なる人酒をもたせて野より出で來たり。此の酒飲みてむとて、よき處をもとめてゆくに、天の川といふ處に至りぬ。みこに馬の頭おはみきまゐる。みこののたまひける、交野を狩りて天の川のほとりに至るを題にて、歌よみて盃させとのたまひければ、よみて奉りける、

かりくらし　たなばたつめに　宿からむ　天の河原に　われは來にけり

ときこえければ、此の歌をみこかへすがへすし給ひて、返しえし給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それがかへし、

ひとゝせに　ひとたびきます　君まてば　やどかす人も　あらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじのみこ醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる

あかなくに　まだきも月の　隱るゝか　山のはにげて　いれずもあらなむ

みこにかはりて紀有常

おしなべて　なみねも平に　なりなゝむ　山のはなくば　月もいらじを

『桐壺』の一節『源氏物語』

野分だちて俄に肌寒き夕暮の程、常よりはおぼし出づること多くて、靭負の命婦といふをつかはす。夕づく夜のをかしき程にいだし立てさせ給ひて、やがてながめおはしますからやうのをりは御あそびなどせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかきならし、はかなくきこえ出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、俤につと添ひておぼさるゝも、やみのうつゝにはなほ劣りけり。命婦かしこにまかでつきて、かどひき入るゝより、氣色あはれなり。やもめずみなれど、人ひとりのおんかしづきに、とかく繕ひたてゝ、めやすき程にすぐし給ひつるを、やみにくれて臥ししづみ給へるはゞに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。南おもてにれろして、母君とみにえものたまはず。今までとまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の蓬生の露分け入り給ふにつけても、恥づかしうなむとて、げにえ堪ふまじく泣き給ふ。まゐりてはいとゞ心苦しう、心ぎもゝ盡くるやうになむと、典侍の奏し給ひしを物おもひ給へ知らぬ心地にもげにこそいと忍びがたう侍りけれ

桐壺更衣を偲ぶ人

とて、やゝためらひて仰せごと傳へきこゆ。しばしは夢かとのみたぢろ
しを、やう〳〵思ひしづまるにしも、さむべきかたなく堪へがたきは、いか
にすべきわざにかとも、問合はすべき人だになきを、忍びてはまゐり給ひ、
なむや。若宮のいと覺束なく戯けき中にすぐし給ふ、心苦しう覺さるゝを
とくまゐり給へなど、はか〳〵しうものたまはせやらず。むせかへらせ給
ひつゝ、かつは人も心よわく見奉らむと、おぼしつゝまぬにしもあらぬ御け
しきの心苦しさに、うけたまはりも果てぬやうにてなむまかで侍りぬる
とて、御文たてまつる。目も見ゐ侍らぬに、かく畏しき仰せごとを光にてな
むとて見給ふ。程經ば少し打紛るゝこともやと、待ち過ぐす月日にそへて、
いと忍びがたきは、わりなきわざになむ。いわけなき人も、いかにと思ひや
りつゝ、諸共にはぐゝまぬおぼつかなさを、今は猶昔の形見になずらへ
て物し給へなど、細に書かせ給へり。

○宮城野の　露吹きむすぶ　風の音に　小萩がもとを　おもひこそやれ

とあれど、え見給ひはてず。命長さのいとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の
思はむことだに恥づかしう思ひ給へ侍れば、百敷に往きかひ侍らひこと

は、ましていとはゞかり多くなむ。かしこきおぼせ事をたび〳〵承りなが
ら、みづからはえなむ思ひ給へたつまじき。若宮はいかにおもはしらるに
か、まゐり給はむことをのみなむおぼしいそぐめれば、ことわりに悲しう
見奉り侍るなど、うち〳〵に思ひ給ふるさまを奏し給へ。ゆゝしき身に侍
れば、斯くておはしますも、いま〳〵しうかたじけなくなどの給ふ。宮は大
殿ごもりにけり。見奉りて委しく御有樣も奏し侍らまはしきを、待ちおは
しますらむを、夜更け侍りぬべしとて急ぐ。くれまどふ心のやみも堪へが
たき片端をだに、はるくばかりにきこえまはしう侍るを、わたくしにも心
のどかに罷でたまへ。年ごろうれしくおもたゞしきつゐでにのみ立寄り
給ひしものを、かゝる御消息にて見奉るかへす〴〵つれなき命にも侍る
かな。生まれし時よりも思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとなるまで、
只此の人の宮づかへの本意必ず遂げさせ奉れ。われなくなりぬとて、口惜
しうてづはるなど、かへすゞ〳〵いさめ置かれ侍りしかば、はか〳〵しう後
見おもふ人なきまじらひはなか〳〵なるべき事と思ひ給へながら、只彼
の遺言を違へじとばかりに出し立て侍りしを、身に餘るまでの御心ざし

のよろづに忝きに、人げなき恥をかくしつゝ交らひ給ふめりつるを、人のそねみ深くつもり、安からぬこと多くなりそひ侍るに、横さまなるやうにて遂にかくなり侍りぬれば、却りてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみになむと、云ひもやらず咽せかへり給ふはゞ、夜もふけぬ。上もしかなむ。わが御心ながら強ちに人目れどろくばかりにおぼされしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契になむ。世にいさゝかも人の心を曲げたることあらじと思ふを、只この人ゆゑにて、わまたわるまじき人のうらみをおひしはて〳〵は、かう打捨てられて心をさめむかたなきに、いとゞ人わろくかたくなになり、はつるもさきの世ゆかしうなむと、うちかへしつゝ御しほたれがちにのみおはしますと語りつゝつきず泣く〳〵、夜いたう更けぬれば、今宵すぐさず御かへり奏せむとて、いそぎまゐる。月は入りがたの空清うすみわたれるに、風いと涼しく吹きて、叢の虫の聲々催しがほなるも、いと立ちはなれにくき草のもとなり。

鈴虫の　聲のかぎりを　つくしても　ながき夜あかず　降るなみだかな

えも乘りやらず、

いとゞしく　虫の音しげき　淺茅生に　つゆおきそふる　雲のうへ人

かごともきこえつべくなむといはせ給ふ。をかしき御贈物などあるべきをりにもあらねば、只かの形見にとて、かゝるようもやと殘しおき給へりける御裝束一くだり御ぐしあげの調度めくもの添へ給ふ。若き人々かなしき事は更にもいはず、内わたりを朝夕にならひて、いとさう〳〵しく、上の御有樣など思出できこゆれば、とくまゐり給はむことをそゝのかしきこゆれど、かくいま〳〵しき身の添ひたてまつらむも、いと人ぎゝうかるべし。又見たてまつらでしばしあらむも、いとうしろめたう思ひきこえ給ひて、すが〳〵ともえまゐらせ奉り給はぬなりけり。

第參節　歌序

大凡歌序とは、歌集の撰ばれたる由來、又は歌の詠まれたる所以を説明するものなり、故に、歌序と名づくる文におのづ

から二種の別あり。歌集の序と通常歌のはしがきと呼ばるゝ小序と是れあり。是等のもの『萬葉集』の時代には、純ら漢文にて物せられしが、此の時代に至り、『古今集』の序文より始めて假名もて述ぶることゝはなりぬ。されば、假名の歌序は醍醐天皇の御代、延喜の頃より出で來たりしなり。歌序の中にて最も世上に名高きを、『古今集』の序と『大堰川行幸和歌序』とす。『古今集』の序は云ふまでもなく歌集の序にして、『大堰川行幸和歌序』は歌の小序なり。是等は共に紀貫之の作に係り、等しく假名もて國文の躰に連ねたれども、其の文脉を吟味する時は、彼の『竹取』『伊勢』等の純粹に國文的なるとは異なりて、多少漢文の格調あるを見る。殊に、又當時に行はれたる『文選』などの文體を模倣せりとおぼしく、莊重なる中にも華麗ならむとを力め、稍繁縟に失する嫌あり。二者

共に散文なるものから、緣語・疊語・對句等を並べ、冠辭をも用あたり。然れども、是れがために語調自然に齊一し、文勢に緩急昂低ありて、恰も音律を具ふるが如き觀あり。

此の外、『庚申夜奉和歌序』は源順の作にして、『古今集』の序につぎて優れたりとの評あり。平兼盛の『子日行幸和歌序』、善滋爲政の奉りたる『高陽院行幸之時應制奉和歌序』、又は藤原通俊の書きたる『後拾遺和歌集』の序など、亦最も見るべきものあり。『後拾遺』以後のに至りては、皆樣に依りて胡蘆を描ける類のみ。

大堰川行幸和歌序

あはれ、我が君の御代長月の九日と、きのふいひて殘れる菊を惜み給ひ、又暮れぬべき秋を惜み給はむとて、月の桂のこなた、春の梅津より御船よそひて、渡守を召して、夕月夜をぐらの山のはとり、行く水の大堰の川邊に行幸し給へれば、久方の空には棚引ける雲もなぐみゆきをまち、流るゝ水底

には濁れる塵なくて御心にぞ協へると詔して、仰せ給へることは、秋の水に浮びては、流るゝ木の葉とあやまたれ、秋の山を見れば、織る人なき錦とおもはえ、紅葉のはの山風に散りて曇らぬ雨ときこえ、菊の花の山本に殘れる空なる星と驚き、霜の鶴河邊に立ちて雲のおかるゝかと疑はれ、夕の猿山のかひになきて人の涙をおとし、旅の雁、雲路にまどひて玉章と見え、遊ぶかもめ水に栖みて人になれたり。入江の松幾世經ぬらむといふ事をぞ詠ませ給ふ。我が筆短き心のこのもかのもにまどひ、つたなき言の葉吹く風の空にみだれつゝ、草の葉の露とともにうれしき涙おち、岩根と共に悅ばしき心ぞ立ちかへる。もし此の言の葉世の末まで殘り、今を昔にくらべて後の今日を聞かむ人、海人の栲繩くりかへし、忍ぶの草の忍ばざらめや。

第四節　日記及び紀行

日記と名づくるものにも、亦二種の別あり。日々の成事を記錄せるものと、旅行中に見聞若しくは遭遇したる事柄を寫せるもの即ち紀行と、是れなり。故に、是等の書中の記事は、縱令作者の僻見混ぜりとするも、大方は實事と見るを得べし。而して、其の文章は、歷史の如き謹嚴なる風なく、物語の如き艶麗なる態なしと雖も、天眞爛漫たる筆致さすがに妙趣少からず。日記に屬するものに、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更科日記』の二種あり。紀行に屬するものに、『土佐日記』『讃岐典侍日記』等あり。此の中、『土佐日記』と『紫式部日記』とは最も賞揚せらる。

『土佐日記』は、紀貫之が延長八年土佐守となりて赴任し、五年の後承平四年に任滿ちて京に還りし時の船路の紀行なり。全篇亡兒追懷の悲みを置めつゝ、時としては海賊の難を風波の中に思ひ、時としては滑稽の筆を徒然に弄するなど、記事五十餘日に亘りぬ。其の文章は、瀟洒にして輕快なり。『土

佐日記』の後、大凡百餘年『更科日記』の出でしまでは、世に紀行といふべき書なし。『更科日記』は菅原孝標の女の書きしものにて、治安三年作者が父孝標と共に上總の國より京に上りし時に筆を起して、夫俊通の病歿せし頃までの事を略記せり。其の體裁始は紀行の如く、終は日記の如く、又始は細にして、終は粗なり。

『紫式部日記』は、紫式部が夫宣孝に後れて上東門院に宮仕せし頃の記錄なり。書中に中宮御懷姙の時より後一條天皇及び後朱雀天皇の御誕生、さては其の祝賀の次第等を記し、又みづから日本紀の局の稱を得し事、御堂關白道長に懸想せられしを謝して貞節を全うせし時の贈答の歌などをも載せたり。されば、其の記事は紫式部の性質行爲を知るに此上なき材料にして、又關白の權勢、宮中の儀式などを知る好

資料たり。其の文章、また『源氏物語』に次ぎて、精到流麗の風を具ふ。

『蜻蛉日記』は、藤原道綱の母の記せるものにて、天曆八年に藤原兼家と相識りし頃より、道綱出生の前後及び其の殿上・元服の事などを記し、終に天延二年道綱二十歳に至る迄の事を書けり。此の內、天德三年より應和元年に至る三年間の記事闕けたれど、概しては村上・冷泉・圓融の御代をかけて二十一年間に亘るものあり。單に年月の下に重要なる事件若しくは所感を錄〳〵たると、長歌の處々に見えたるとは、爾餘の日記に異なるところ、おのづから一種の體裁を爲せるものとやいはむ。『和泉式部日記』は和泉式部の書けるものにて、又『和泉式部物語』ともいふ。和泉式部は紫式部と同時代の人にて、和泉守橘道貞の妻なりしが、夫逝去の後は上東門院

に仕へ、後に又藤原保昌に嫁して、小式部内侍を生みぬ。式部和歌に巧にして、兼ねて漢學に精しく、佛經にも通じたり。然れども、其の素行修らず、上東門院に宮仕せし頃、冷泉院の皇子爲尊・敦道の二親王に前後慇懃を通じたることあり。其の日記は、即ち爲尊親王薨御の翌年長保五年四月の頃より、其の弟宮敦道親王式部の許へ通ひ給ひしことの始末を書きつけたるものなり。歌も宜しく、文章も輕妙なれど、『紫式部日記』の精到にして流麗なるには及ぶべからず。『讃岐典侍日記』は、堀河天皇に奉仕したる讃岐典侍の書けるものなり。嘉祥二年五月堀河天皇の御惱及び崩御の事より、鳥羽天皇の踐祚の事大嘗會の有樣などを記したり。堀河天皇の御惱の事を記せるあたりは、文章細緻にして哀深し。

大津より浦戸に至る船路（『土佐日記』）

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子こゝにして俄に失せにしかば、此の頃の出立ちいそぎを見れど、何事もえいはず。京へ還るに女子のなきのみぞ悲み戀ふる。ある人々もえ堪へずこの間にある人の讀まで出せる歌

みやこへと思ふものゝ悲しきは かへらぬ人のあればなりけり

又ある時には、

おるものと忘れつゝなほなき人を いづらと問ふぞ悲しかりける

といひける間に、鹿兒の崎といふ處に、守のはらから又こと人これかれ、酒など持て追ひ來て、磯におり居て、別れがたきことをいふ。守の館の人々の中に、此の來る人々ぞ心あるやうにいはれはのめく。かく別れがたくいひて、かの人々の口網も諸持にて、此の海邊にて荷ひいだせる歌

をしと思ふ人やとまると あしかもの うちむれてこそ我は來にけれ

といひてありければ、いといたく愛でゝ、行く人のよめりける

棹させど そこひ知られぬわだつみの ふかき心を君に見るかな

といふ間に、揖取ものゝふあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、はや

く往なむとて、潮みちぬ、風も吹きぬべしとさわげば、船に乘りなむとす。此の折に、ある人々折節につけて、唐歌ども時に似つかはしきを云ふ。又、ある人西國なれど、甲斐歌など歌ふ。かく歌ふうちにふなやかたの塵も散り、空行く雲もたゞよひぬとぞいふめる。今宵浦戸にとまる。藤原言實、橘季衡、と人々追ひ來たり。

御產の祈（『紫式部日記』）

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿のありさま云はむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつゝ、大かたの空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまさりけり。やう〳〵涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々はかなき物語するをきこしめしつゝ、惱ましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御有樣などのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめにはかゝる御前をこそ尋ねまゐるべかりけれと、現心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき。まだ夜深き程の月さしくもり、木の

下をぐらきに、御格子まゐりなばや、女官はいまださふらはじ、藏人まゐれなどいひしらふ程に、後夜の鐘うちおどろかし、五壇の御修法ときはじめつ。われも〳〵とうちわげたる伴僧の聲々、遠く近く聞きわたされたる程、おどろ〳〵しくたふとし。觀音院の僧正東の對より廿人の伴僧を率て御加持まゐり給ふ。足音渡殿の端のとゞろ〳〵と踏みならさるゝさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場殿、遍昭寺の僧都は文殿などにうちつれたる淨衣すがたまで、ゆゑ〳〵しき唐橋どもわたりつゝ、木の間をわけてかへり入る程も、遥に見やらるゝ心地して、あはれなり。さいさ阿闍梨も、大威德を敬ひて、腰をかゞめたり。人々まゐりつれば、夜もあけぬ。渡殿の戸口の局に見いだせば、はのうちきりたる朝のつゆもまだおちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらはせ給ふ。

第五節　草子

草子は後世に所謂隨筆・漫錄・漫筆などゝおなじく、公衆に示

す目的ありて書けるにあらで、只作者が見聞き又は感ずるに隨ひて書き下せる私の筆ずさみなり。此の期に草子と呼ばるべきものは、只『枕草子』一あるのみ。其の作者を清少納言といふ。

清少納言は清原元輔の女なり。後一條天皇の皇后定子に仕へて女房となり〜が、父の元輔少納言なりしかば、其の姓をかけて清少納言とぞ云ひ〜。天資敏捷にして活潑、歌文を能くし、才學當時に冠絶せり。然れども、まゝ博識を衒ひ所能を弄する傾ありて、內行も脩らざりしが如し。紫式部の謹愼謙讓なりしに比しては大に遜色ありと謂ふべし。晩年の事情は詳かならず。或は落魄して四國に下りきとも、又奥羽にさすらひきとも云へり。

『枕草子』は、清少納言が視聽に觸れたる社會の狀態、人情の

趣向、并に彼れが胸底に鬱積〜たる感懷等を。ある題目の下に筆に任せて書きつらねたるものあり。一部斷簡零篇の集合に過ぎずと雖も、當時の世態髣髴たる中に、作者の性質躍如として現れたり。犀利なる筆法もて或は公卿の心術、貴嬪の舉動を批判し、或は緻密なる觀察によりて四季の光景、殿上の有樣を描寫せる、是れ皆彼れが口自ら云ひ、眼親しく見しところなり。實に此の草子を讀み行けば、さながら著者に接〜て、其の豪放快活なる人と爲りを知り、又輕卒なる風采を見る心地す。而して、其の炬の如き烱眼は、能く事の眞相を看破して、往々讀者の心を寒からしめ、又は痛快を覺えしむ。其の文章は、能く其の書中の記事と應じて或は細緻、或は流麗、或は簡勁にして、且つ議論に敍事に其の筆を驅る如き趣あり。特に一氣呵成の筆づかひと簡短なる警語とを以て、深

長なる意味を表明するは、此の草子の外に其の比を見ざる所とす。是等すべて、著者が或は滔々として辨論し、或は一言に喝破するが如き氣風を表露するものか。清少納言が此の草子を書きしは、おもに宮仕せし頃にて、又晩年に加筆せしもあるべしといふ。

名文はあるべし

淑景舍の春宮に參り給へるさま（『枕草子』）

淑景舍、春宮に參り給ふ程のことなど、いかゝはめでたからぬはなし。正月十日にまゐり給ひて、宮の御方に御文などはしげうかよへど、御對面などはなきを、二月十日宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ、心ことに磨きつくろひ、女房なども皆用意したり。夜なかばかりに渡らせ給ひしかば、幾程もなくて明けぬ。登花殿の東の二間に御しつらひはしたり。つとめていとく御格子まゐり渡して、曉に殿うへひとつ御車にてまゐり給ひにけり。宮は、御曹子の南に四尺の屏風西東に隔てゝ北面にたてゝ御たゝみしとねうちおきて、御火桶ばかりまゐりたり。御屏風の

南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。こなたにて御ぐしなどまゐる程、淑景舍は見奉りきやと問はせ給へば、いまだいかでか、積善寺供養の日御うしろをわづかにときこゆれば、其の柱と屏風との下によりて、我がうしろより見よ、いと美しき君ぞとの給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋のおんぞどもに、紅のうちたる御衣、三重がうへに只ひきかさねて奉りたるに、紅梅には濃き衣こそをかしけれ、今は、紅梅は着でもありぬべし。されど、蒲黄などのにくければ、紅にはあはぬなりとの給はすれど、只いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣にやがて御かたちの匂ひあはせ給ふぞ、なほことよき人もかくやおはしますらむとぞゆかしき。さて、ねざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風にそひつきてのぞくを、あしかめり、うしろめたきわざときこえごつ人々もいとをかし。御障子の明きたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ども紅のはりたる二つばかり、女房の裳なめり、引きかけて奥によりて東面におはすれば、只御衣などぞ見ゆる。淑景舍は北にすこし寄りて南向きにおはす。紅梅ども、あまた濃く薄くて、濃き綾の御衣、すこしあかき蘇枋の織物の袿、蒲黄の固

紋の著やかなる御衣奉りて、扇をつとさしかくし給へり。いといみじくげにめでたくうつくしと見え給ふ。殿は薄色の直衣、蒲黄の織物の御指貫、紅の御衣ども御紐さして、廂の柱にうしろをあてゝ、こなたざまにむきておはしますめでたき御有樣どもを打ちゑみて、例のたはふれごとをせさせ給ふ。淑景舍の、檜に書きたるやうに美しげにてゐさせ給へるに、宮いとやすらに、今少しおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひあはせ給ひて、なほたぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

かたはらいたきもの（『枕草紙』）

まらうどなどに逢ひて物いふに、奥のかたにうち解けごと人の云ふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく醉ひて、おなじ事したる、聞き居たるをも知らで、人のうへ言ひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所、近き所などにて、下種どものざれかはしたる。にくげなる兒を、おのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲の眞似にて、言ひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の物おぼえがほに人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬ我が歌を、人に語りきかせて、人の譽めし事などいふも片腹いたし。人の起きて物語などする傍に、あさましう打ちとけて寢たる人。まだ彈き調へぬ琴を、心一つやりて、さやうのかた知りつる人の前にて彈く。いとどしう住まぬ聟のさるべき所にて男に逢ひたる。

第六節　雜史

およそ國史は、從來『古事記』を除く外は、『日本書紀』をはじめ悉く漢文なりし事、既に前に述べたり。而して、是等はすべて勅命を以て撰進するを例とせ〜を、醍醐天皇以後は官修の擧絶えにしかば、國史といふもの久しく皆無の姿となれり。然るに、此の時代の末葉に至り、小說的物語普く公衆の嗜好に合ふに及び、其等を摸倣せる一種の歷史あらはれたり。文章其の他總ての體裁小說的物語に類するものから、なほ彼の物語の虛構を主とせるとは全く異なりて、專ら世上の

實事を記載す。予輩がさきに小說的物語の下に於いて史的物語といひて區別せしもの、即ち是れなり。『榮花物語』『今鏡』等は此の物語に屬す。『大鏡』『水鏡』等はやゝ異なる點も見ゆめれど、大體の結構は又おなじく物語の體を出でず。かゝれば、其の文章は大方美しくして趣向また面白きが故に、人をして樂んで讀下せしむるのみならず、漢文の正史にもまして、細密隱微なることまでも隈なく筆を着けしを以て、當代の風俗・言語等を知るには此上なき材料なり。

『榮花物語』は、宇多天皇の寬平年中に筆を起して、專ら村上天皇以後の事蹟を描寫し、堀河天皇の寬治六年に至る。其の記事多くは藤原氏の一族に關し、殊に御堂關白道長が榮華の有樣を記載する事詳細なり。此の物語は一に『世繼物語』ともいふ。卷の數は四十帖、一帖毎に風雅なる名稱を附したること、恰も『源氏物語』に似たり。著者は赤染衞門なりとも、藤原爲業ともいひ傳へたれど、最近の說には何人か紫式部・赤染衞門・和泉式部等諸才女の日記・家集などを基として、編纂したるものなるべしといふ。其の文章は艶麗にして精到、叙事の體裁亦能く其を體を得たり。就中、悲哀若しくは優美なる事蹟を描寫せる邊に妙所多く、人物も事件も稍躍々たる趣あり。但し、作者の女流あればにや、往々筆力の輭弱なる嫌なき能はず、

『大鏡』は藤原爲業の作なり。爲業は崇德天皇(一七八四―一八〇一在位)の御代を年の盛りにて過しゝ人にて、官は皇太后宮の大進たりき。後年薙髮して大原山に隱遁し、法名を寂然と呼べり。書中の記事は、後一條天皇の萬壽三年雲林院の菩提講に於いて、百五十歳なる大宅世繼と百四十歳なる夏

山茂樹とが會見を以て其の序を開き、文德天皇の嘉祥三年より萬壽三年に至る百七十六年間の事蹟をば、帝王の本紀と大臣の列傳とに分かちて記したる紀傳体の歴史なり。其の文章には一種の特色具はりて、時としては詩を引き、時としては歌を點ずるも、なほよく諧和して艱澁のところなく、筆力剛健自在にして素樸の趣掬すべし。これを『榮花物語』に比すれば、かれは優柔にして細巧なるもの、これと全く相反せり。遮莫、『榮花物語』と『大鏡』とは蓋し雜史中の双璧なり。『水鏡』と『今鏡』とは、全く此の二書に倣ひて作れるものなり。就中、『水鏡』は『大鏡』に、『今鏡』は『榮花』に擬せしごころ多し。作者は共に中山忠親(一七九一―一八五五)なりといふ。忠親は藤原師實の曾孫にして、二條天皇の永曆の初藏人頭となり、六條・高倉・安德天皇の三朝に歴仕し、後鳥羽天皇の建久六

年に逝きぬ。享年六十五。『水鏡』は、『大鏡』に記載せる事蹟以前に溯りて、神武天皇より仁明天皇に至る歴代の變遷を略述せり。『今鏡』は、又『小鏡』とも『續世繼』ともいひて、後一條天皇の御宇より高倉天皇の朝に至る事蹟を載せたり。其の外、『宇治大納言物語』一に『今昔物語』といふ者あり。其体裁は以上の諸作とは太く異なりて、作者が見聞の逸話を隨筆樣に集錄せしもの、中に怪談虛說少からずと雖も、記實の項亦多く、往々史傳の闕を補ふに足る。然れども、本書の眞價が事實よりも寧ろ文學上に存せるとは『大鏡』等に於けるよりも更に甚し。著者は源隆國といへり。文章は當時の普通語をさながらに書きなしたるものなれば、率直簡明にして枯淡、而も一種言ふべからざる趣致を蓄ふ。後に出でたる『宇治拾遺物語』は、此の物語に漏れたるを拾集したるものにて、

躰裁文章すべて同じ。

『かゞやく藤壺』の一節『榮花物語』

このごろ、藤壺の御方、八重紅梅を織りたる上着はみなから綾なり。殿上人などの花折らぬ人なく、今めかしう思ひたり。たゝむ月に藤壺まかでさせ給ふべくて、土御門殿いみじう拂ひ、いとゞ修理加へみがゝせ給ふ。かくて二月になりぬれば、ついたち頃に出でさせ給ふ。うへいとあかずさう〳〵しき御氣色なれど、有るやうあるべしとぞ、世人申すめる。さて出でさせ給ひぬ。御送り、上達部、殿上人さま〳〵〳〵に祿どもありて、歸り給ふ。かゝるほどに、內渡りおはんつれ〳〵に思されて、このひまにいかで一宮見奉らんと思食せど、萬つゝましうて、ゐ宣はせぬに、殿此頃こそ一のみこ見奉らせ給はめと奏せさせ給へば、いと〳〵嬉しう思しめされて、院にも聞えさせ給へば、中宮參らせ給ふべきよし度々あれど、包ましうのみ思しめすに、まめやかに院も申させ給へば、思し立たせ給ふ。帥殿なども、などか宮見奉らせ給はんに、いとゝ御心ざしもまさらせ給はざらん。愚なるべきやうなしなど、定めさせ給ひて、そゝきたちて、二月つごもりに參らせ給ふ。御輿なども事々しければ、一宮參らせ給ふ。御迎へにとて大殿の唐の御車をぞゐて參れる。それに宮姫宮奉れり。ざるべき人々皆御迎へにかゞへたてゝ參り奉らせ給ふ。殿の御心ざまあさましきまで有りがたくおはしますを、世にめでたき事に申すべし。帥殿も、わが御心のいかなればにか、いと思はずなりける殿の御心かな、女御參り給ひて後はよもとこそ思ひ聞ゑつるに、一宮の御迎への有樣などぞ、誠に有りがたかりける御心なりけり、我等はしもゐかくはあらじとぞ、內々には聞え給ひける。さて參らせ給へれば、姫宮うつくしき程にならせ給へるに、又今宮のゐもいはずきらゝかにおはしますに、御門御目拭はせ給ふべし。女一宮も四五ばかりにれはしまして、物などいとよう宣はす。女院も、よき夜とて、今宮見奉らせ給ふに、うへの御兒おひにぞいとよう似奉らせ給へる。おはれにうつくしう見奉らせ給ふ。猶はやん事なく捨てがたき物に思ひ聞えさせ給へるも、ことわりに見ゐさせ給ふ。さて日頃おはしませば、殿の御前今宮を見奉らせ給ひて、懷きうつくしみ奉らせ給はざりける事と、誰も御子の悲しさは知り給へる事なれば、おはれに見奉らせ給ふ。うへの御笛を取らせ給へば、いとゆゝしうつくしう見奉

らせ給ふ。よろづ心長閑に宮に語らひ聞えさせ給へど、宮例の御有樣におはしまさず、物心細げに哀なることどもをのみぞ申させ給ふ。此度は參るにつゝましう覺え侍れば、今一度見奉り、又今宮の御有樣うしろめたくて、かく思ひたち侍るなりなど、まめやかに哀に申させ給ふを、うへ、いなや、いかなればなどかくは宣はするぞなど、聞えさせ給へど、なほ物の心細くのみ覺え侍る。など、常なるまじき御事どもをのみあれば、うたてゆゝしうと仰せらる。身をばともかうも思ひ給へらず、唯稚き御有樣のうしろめたさになど、いみじう申させ給ひけり。斯くて三月に藤壺后に立たせ給ふべき宣旨下りぬ。中宮と聞えさす。此の侍はせ給ふをば、皇后宮と聞えさす。やがて三月つごもりに大饗せさせ給ひて、又入らせ給ふ。今年ぞ十三にならせ給ひける。おはれに若くめでたき后にもおはしますかな。

菅公の配流（『大鏡』）

右大臣才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣り給へるにより、右大臣おんおぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からず思したる程

にざるべきにやおはしけむ右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日太宰權帥になし奉りて流され給ふ。此の大臣の子供おまたおはせしに、女君達は婿どりし、男君達は皆ほど〳〵につけて位どもおはせしを、それも皆かた〳〵に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君達女君達慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなむとおぼやけも許さしめ給ひしかば、其にゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、此の御子供と同じかたにだに遣はさゞりけり。かた〳〵にいと悲しくおぼして、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かば　にほひおこせよ　うめの花　あるじなしとて　春な忘れそ

また亭子のみかどにきこえさせ給ふ、

流れゆく　吾はみくづと　なりはてぬ　君しがらみと　なりてとゞめよ

なき事によりかく罪せられ給ふを思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。其の程きはめて悲しきこと多かり。日比經て都遠くなるまゝに、おはれに心細くおぼされて、

君がすむ　宿のこずゑを　ゆく〳〵と　隱るゝまでも　かへりみしかな

また播磨國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて作らしめ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

筑紫におはしましつきて、あはれに心細くおぼさるゝ夕、をち方に處々煙り立つを御覽じて、

夕されば　野にも山にも　立つ烟　なげきよりこそ　もえまさりけれ

また雲のうきてたゞよふを御覽じて、

山わかれ　飛びゆく雲の　歸りくる　かげ見るときぞ　なほ頼まるゝ

さりともと世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならず　たゞよふ水の　底までも　きよきこゝろは　月ぞてらさむ

これいとかしこく遊ばしたりかしげに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。まことにおぼろ〳〵しき事はさるものにて、かくやうの歌や詩などをさへいとなだらかにゆゑ〳〵しういひつゞけ給ふと、見聞く人、目もあやにあさましくあはれにまもり居たり。物のゆゑ知りたる人なども、無

下に近く居よりて外目せず、見聞くけしきどもを見て、いよ〳〵はへて物をくり出すやうに云ひつゞくる程ぞ、誠に稀有なるや。繁樹涙を拭ひつゝけうじ居たり。筑紫におはしますところの御門も、固めておはします。大貳の居どころは遙なれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

これは文集の白居易の遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にもまさりざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。又、かの筑紫にて九月九日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましゝ時、九月のこよひ內裏にて菊の宴ありしに、此のれとゞ作らしめ給へりける詩を帝かしこく感じ給ひて、御衣賜はりたまへりしを、筑紫まで下らしめ給へりければ、御覽ずるに、其のをりおぼしめし出でゝ作らせ給ひける

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

此の詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事どもちり〳〵なるにもあらず、彼の筑紫にて作りあつめざせ給へりけるを、書きあつめ一卷とせしめ給ひて、『後集』と名づけられたり。又をり〳〵の歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世にちりきこえしなり。世繼が若う侍りし時、此の事のせめてあはれに悲しく侍りしかば、大學の衆のなきふがうにはいますかりしを問ひたづね語らひとりて、さるべき餌袋わりごやうのもの調じて打具してまかりつゝ、ならひとりて侍りしかど、老のけのはなはだしき事の、皆こそ忘れ侍りにけれ。是れは只頗る覺え侍るなりといへば、聞く人々、げに〳〵いみじきすきものにも物し給ひけるかな、今の人はさる心ありなむやと感じあへり。又、雨の日うち詠め給ひて、

あめのした　かはける程の　なければや　きてし濡衣　ひるよしもなき

やがてかしこにて失せ給へり。

山横川賀能地藏の事（『宇治大納言物語』）

これも今は昔、山の横川に賀能知院といふ僧、極めて破戒無慙のものにて、晝夜に佛の物を取りつかふ事をのみしけり。横川の執行にてありけり。政

所へ行くとて、塔の下を常に過ぎありきければ、塔の下にふるき地藏の物の中に棄ておきたるをきと見奉りて、時々きぬかぶりしたるをうちぬぎ、頭を傾けて少し敬ひ拜みつゝ、行く時もありけり。かゝる程に、かの賀能は かなく失せぬ。師の僧都これを聞きて、かの僧破戒無慙の者にて、後世定めて地獄に落ちむこと疑なしと、心憂がり哀み給ふことかぎりなし。かゝる程に、塔の下の地藏こそ此の程見え給はね、如何なる事にかと、院中の人々言ひあひたり。人の修理し奉らむとて、取り奉りたるにやなどいひける程に、此の僧都の夢に見え給ふやう、此の地藏の見え給はぬは如何なる事ぞと尋ね給ふに、傍に僧ありて曰はく、此の地藏菩薩早う賀能知院が無間地獄に落ちし其の日、やがて助けむとて相具して入り給ひしなりといふ。夢心地にいとあさましくて、如何にしてさる罪人には具して入り給ひたるぞと問ひ給へば、塔のもとを常に過ぐるに、地藏を見やり申して、時々拜み奉りし故なりと答ふ。さは、此の僧に誠に具してはしたるにやと思すはどに、其の後又僧都の夢に見給ふやう、塔のもとにおはして見給へば、此の地藏立ち給ひたり。これは失せ給ひし地藏、如何にして出で來たまひたる

ぞとの給へば、又人のいふやう賢能具して、地獄へ入りて助けて還り給へるなり。されば、御足の燒け給へるなりといふ。御足を見給へば、誠に御足黑う燒け給ひけり。夢心地に誠にあさましき事かぎりなし。さて、夢さめて、涙留らずして、急ぎおはして塔の下を見給へば、現にも地藏立ち給へり。御足を見れば誠に燒け給へり。これを見給ふに、哀に悲しきことかぎりなし。さて、泣く〳〵此の地藏を抱き出し奉り給ひてけり。今におはします。二尺五寸ばかりの程にこそと人は語りき。是れ語りける人は拜み奉りけりとぞ。

第四編　鎌倉時代の文學

第壹章　總論

鎌倉時代とは、後鳥羽天皇の文治二年に源頼朝覇府を鎌倉に開きし時より後醍醐天皇の建武中興の頃までをいふ。其の間およそ百五十年なり。

鎌倉時代の文學は、平安時代のに似たるものと、また大に然らざるものとを含めり。歌謳の綺語を列ねて只管艶麗ならむことを務めたるが如きは、特に此の時代の現象なりしかども、是は只前代の末葉に見えたる傾向を追うて進みたるのみ。日記紀行の文の如き、また彼の舊路をとりて走れるものなり。されば、是等諸種の文學を平安時代のに比較するに、おのづからなる趨勢を繼續したる外、更に異なる點あるを

見ず。加之、是等の文學は、彼の時代に於けるが如く、上流社會のなぐさみ草たるに過ぎざりき。然るに、此の時代に始めて現はれたる戰記文は、本期文學の異彩として揭出すべき者たり。是は啻に其の材料の嶄新なるのみならず、其の用語文章も亦太く異なりて、頗る通俗的傾向を現ぜり。かゝれば、鎌倉時代の文學は、平安時代のゝ貴族的なりしに、今一つの平民的趣味をも加へたるものなりと謂ふを得べし。而して、彼の文學の一般に優美なりしに引きかへて、此は雄壯なるところある、又彼の文學の概して樂天的なりしに反して、此は厭世的傾向を帶びたる、共に著き差異となすべし。是れ孰れも、當代の初期に於ける兵革鬪爭のおのづから人心をして勇武に傾かしめたると、榮枯興亡の定まりなきが深く人間無常の觀念を鼓吹したるとに依る。漢學著く衰微して、正格な

る漢文を作り得るもの少く、一種異樣なる擬漢文體を生ずるに至りしこと、亦注意すべき件なり。其の頃出でたる『東鑑』をはじめ、『台記』『人車記』『玉海』『明月記』『山槐記』『百練抄』『貞永式目』等其の他手簡の文、悉く此の種の文躰なり。此等は固より純文學に干繫あるものならねど、時文の大半を占めしものなるを以て、左に一二の標品を示すべし。

『東鑑』の一節

(建保五年四月十七日　甲子晴　宋人和卿造畢唐船、今日召數百輩疋夫於諸御家人、擬浮彼船於由比浦、即有御出右京兆監臨給、信濃守行光爲今日行事、隨和卿之訓說、諸人盡筋力而曳之、自午剋至申斜、然而此所之爲體、唐船非可出入之海浦、之間、不能浮出、仍還御、彼船徒朽損于砂頭云々

『明月記』の一節

(文曆元年八月七日癸酉云々　辰時許り、勅撰愚草廿卷、綴置南庭、燒之、已爲灰燼、寒勅未闕卷軸、以前、遭如此事、更无前蹤、无冥助、无機緣之條、已以露顯、徒

可蒙誹謗罵辱、置而无詮者也。

『貞永式目』の一節

一可修理神社專祭祀事

右神者、依人之敬增威、人者依神之德添運、然則恒例之祭祀不致陵夷、如在之禮奠莫令怠慢、因茲於關東御分國々並庄園、地頭神主等各存其趣、可致精誠也、兼又至有封社者、任代々符、小破之時且加修理、若及大破、令言上子細者、隨其左右、可有其沙汰矣。

言語は、前代に於いても既に漢學・佛教の流行につれて、外國語の混交漸く多かりしが、此の時代に入りては、更に著きものあり。戰記文殊に然り。而して、此の時代には漢學の講究次第に衰へたれば、措辭用語にもやゝ亂雜なるものあるに至りぬ。また戰記などに見えたる武士の詞は、剛强の口氣に富みて、撥呼促呼の音便を用ゐたるもの多し。然れども、其の文章は巧に彼此の語を混用して、雄渾・莊重・謹嚴を要する時には

は專ら漢語をとり、悲哀・優美・緻密を欲するをりには固有の國語及び梵語等をとりぬ。故に、章句の間波瀾頓挫自在にして、活動の妙具はれるもの尠からず。

第貳章　歌謳

第壹節　總說

平安時代の末葉は、兵馬倥偬の爲に諸般の文物其の進步を澁滯せし跡多かりしに、和歌のみは尙ほ依然として行はれ、上達部・殿上人は勿論、武人中にも風月に雅懷を寄するもの尠からざりき。されば、金鼓の聲漸く止みて政權遂に武門の手に遷りし後なる本期の狀態は、大凡推測するを得べし。さらぬだに、從來政治に關與すること稀なりし大宮人は、いよ

いよ閑を得て風雅の道に心を委ぬるもの多かり。當代の初期には、藤原俊成尙ほ世に在り、後鳥羽天皇をはじめ奉り、僧西行・藤原隆信・藤原良經・源通親等高手として其の名聞えたり。土御門天皇の御代建仁元年に、後鳥羽上皇和歌所を院中に設けさせ給ひて、專ら斯道の奬勵を計り給ひつ。土御門・順德の二天皇、藤原定家・藤原家隆・源雅經・僧寂蓮・源實朝・僧慈鎭・式子內親王等相次ぎて世に出でぬ。當時歌合の會頻りに流行し、歌人は全力を盡くして其の勝敗を爭へり。されば、題詠に思考を構ふることは、前代にまゝて一層巧を加へ、着想新奇にゝて複雜なるを喜びぬ。實朝の歌の古調を帶びて雄渾なりしは、特に異數なりき。勅撰の歌集には、『新古今和歌集』より初めて、『新勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾遺』『新後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』等、歷朝殆ど其の事あらざるはなし。其

の他、家々の集に、後鳥羽・土御門・順德三上皇の御集、源實朝の『金槐集』、慈鎭和尙の『拾玉集』、西行法師の『山家集』、家隆の『壬二集』等あり。歌學の書には、定家の『詠歌大概』『未來記』『和歌庭訓』、鴨長明の『無名抄』傳はれり、然れども、『新古今』以後の歌人には、史上に錄すべき程のもの甚だ稀なり。而して、其の稀にある歌人といへども、大方は『新古今』の弊をのみ踏襲して、單に詞花言葉の修飾を事としたるのみ。藤原爲家の如き當時の達人と謂はれし者も、尙ほ緣語を弄するを以て我が事終はれりと思惟したるが如し。其の長子爲氏二條家といひ、次子爲敎毘沙門堂と稱し、三子爲相冷泉家と唱へ、各門戶を張りて歌學の師範を爲し、妄に制禁を設くるに至りては、敷島の道いよ〳〵退轉せり。

此の間、長歌全く跡を絕ちて、短歌ひとり榮え、連歌稀に見え

たり。今樣には催馬樂・朗詠の一轉して專ら調曲を主とせる歌曲體のもの大に流行しぬ。是はもとより前代に於いても散見せりと雖も、此の時代に入りて一層隆盛とあれるなり。

第貳節　勅撰歌集

本期に於ける和歌の變遷は、亦勅撰歌集の系統に就きて尋ぬべし。先づ『新古今和歌集』は、土御門天皇の元久二年に、後鳥羽上皇の院宣によりて、當時の名匠あり〜通具・有家・定家・家隆・雅經等の撰進せるものなり。卷の數をはじめ部門の類別等、略前時代の諸歌集におなじ。此の集、上の七代集に見えたる歌の外、まゝ『萬葉集』に出でたるのをも採れり。故に、集中に列載せる歌人には人麿・赤人、さては貫之・躬恒等、前時代の諸集に見えたる名手にして其の名の漏れたるもの、殆ど

あるとなし。

此の集に見えたる感想につきては、特に紹介すべき程の點あらず。即ち、此の集の歌人が題目とする所は、往昔の歌人が爲〜たるとおなじく、月花のあはれを詠じ、男女相思の情を歌ひ、身を歎き人を悲しむなどの類に過ぎざればなり。然れども、其の着想と措辭との新奇にして餘韻深き、又は其の句調の瑰麗にして快活なる、優に一機軸を出せるものなり。此の集を以て花實兩全の『古今集』に比するに、彼は天然の雅致に富み、此は人工の妙に富めり。是を以て、此の集には古調の歌をもまゝ改竄して、當時の風調に合せたるものあるを見る。古詩・古歌の意或は句を飜案若しくは轉用したるもの多きは、また此の集を以て最とすべし。斯くの如く、『新古今集』は感想の上に格別の變化を見ざりしも、格調に一種獨特の

所ありて、思ひつき言ひなしざまの面白かりしかば、一世を風靡して永く後世の稱賛をも博するを得たり。然れども、其の姿のよきは必ずしも其の心のよきにあらず、詞艶なるに比して心の誠少なきが故に、後の之を學べるもの往々纖巧の弊に陷るに至れり。

『新古今』以後二十六年を經て、後白河天皇の貞永元年に定家の撰進せる『新勅撰集』は『新古今』の弊を矯めむとして撰ばれたるものなりしが、却りて新奇を衒ふ氣味ありて、彼の集に劣ること遠し。『新勅撰集』の後廿年を過ぎて後深草天皇の建長三年に、藤原爲家後嵯峨上皇の院宣を奉じて『續後撰』を撰び、また十五年にして龜山天皇の文永二年に、爲家再び藤原基通・同行基・同光俊等と共に『續古今』を撰び、其の後十二年を經て後宇多天皇の建治二年に、藤原爲氏『後拾遺集』

を撰進せり。其の他、『新後撰集』は後二條天皇の嘉元元年に藤原爲世の上りしもの、『玉葉集』は花園天皇の正和二年に藤原爲兼の上りしもの、『續千載』は後醍醐天皇の元慶二年に爲世再び撰進し、『續後拾遺』は同天皇の正中二年に藤原爲藤・同爲定撰進せり。『新古今』の出でゝより此の間百二十一年、勅撰歌集の數すべて九種に及べり。『新勅撰』以下の歌集には殆ど見るべきものなし。歌人の有名なるものも、大方『新古今』時代にかぎりて、其の以後には勅撰歌集の撰者其の人だに技倆の疑はしきものなきにあらず。こゝには最も卓出せる西行・定家・家隆・實朝の四人を傳へむとす。

僧西行(一七七八―一八五〇)は、俗名を佐藤憲清といひき。崇德天皇の朝に鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられぬ。資性勇敢にして、騎射を善くし、韜略に通じ、

併せて歌道に造詣深かり〜かば、甚だ上皇の愛する所となりにき。然るに西行は營利を好まず、常に遁世の志あり。年二十三にして遂に官祿妻子を棄て、嵯峨に往きて僧となりぬ。法名を圓位といひ、後更に改めて西行と言へり。遁世の後は嘗て一所に定住せず、一笠一笈興に任せて或は西海に或は奥羽に歴遊〜、其の足跡殆ど六十餘州に洽かりき。建久元年二月十六日齢七十三にて寂せり。詠歌の大半は殆ど悲哀の調を帶びたれど、幽玄の趣深く、瀟洒爽快なるもの亦少からず。句法能く諧和して流暢、其の感想を發露するに餘裕ありしが如し。家集を『山家集』といひ、また自ら詠みおける歌を抄出して、三十六番につがひたるもの一卷を『御裳濯の歌合』と名づけ、他の一卷を『宮河歌合』と名づく。其の外に著者が見聞のまゝを書き集めたる佛教的隨筆を『撰集抄』といふ。

藤原定家(一八一七—一九〇一)は俊成の子なり。資性頗る躁急にして進取の氣象に富み、まゝ才氣に誇負する癖ありき。壽永五年左近衛權中將參議治部卿民部卿等の諸官を經て、正二位に叙せられ、貞永元年權中納言となりぬ。世に京極黄門と稱す。歌學の外、史傳を渉獵し、又詩文を作り、兼て弓馬の術にも長じたり。就中、和歌の才は殆ど其の天稟に出で、加ふるに家學として奥義秘説を繼承せしかば、能く一世に獨歩するに至りぬ。其の歌を作るや、勵精苟もせず、必ず南面の障子を開かせて遠く外方を望み、衣襟を整へ坐を正うして詠ずるを常とせり。されば其の風格高雅にして、敬重の念を起さしむるもの多し。而して、措辭の一點に關しては、定家は殆ど無比の才能を有するもの、縱横無盡意到り筆到らざるなし。其の著述中、歌學に關するものには『詠歌大概』『雨中

吟』『未來記』『顯註密勘』『僻案抄』『毎月鈔』『源氏奥入』あり、日記に『明月記』あり、歌集に『拾遺愚艸』『同員外』等あり。勅を奉じて『新古今』『新勅撰』の二集を撰進せしことは前に述べたるが如し。仁治二年八月二十日、享年八十にて薨じぬ。定家の子爲家、また父祖の衣鉢を承けて才力稍見るべきものあり。爲家の子爲氏・爲教・爲相に至りては、所謂三家分裂の祖を爲しゝもの、巨匠の後として各一世を支配したれども、其の歌は定家の弊のみを襲ひて、輕佻浮華に流れつ。さて、爲氏・爲相の後なる二條・冷泉の二派は、永く世の師範家として目せられしが、爲教の後なる毘沙門堂のみは二世にして亡びたり。定家と同時に其の盛名を齊しくせしものを藤原家隆とす。家隆は（一八一一―一八九七）壬生中納言光隆の第二子なり。少壯のをりには、歌人としてさまで聞ゆることもなかりし

が、建久の頃よりやゝ〳〵其の名を顯はし、遂に歌道の奥義に達して、かの定家をすらも凌駕せむとするに至れり。元久二年勅命を以て『新古今』を撰進せし由は既に述べつ。其の一生の間に詠ぜしところの歌およそ六萬首、今に傳はるものは僅に其の十の一に及ばずといふ。官は宮内卿に進み、位は從二位に至りぬ。故に、世に壬生二位といふ。嘉禎三年四月九日、齢八十にて薨ぜり。家集を『玉吟集』又『壬二集』と稱す。歌想着實にして妄りに新奇を衒はず、格調頗る流麗にして高尚なり。之を家隆の時輩に迪でたる所とす。

さて、家隆の歌はかくの如く稍當時の風格を離れたる所ありきといへども、仔細に稽ふる時は、其の着想と措辭と兩つながら軟弱の氣味ありて、全く時弊を脱せしものといふべからず。若し此の時代にありて、能く是等の風格を離れて優

に一異彩を點出せしものを求むれば、獨り鎌倉三代の將軍源實朝を推さゞるを得ず。

實朝(一八五二―一八七八)は源頼朝の第二子なり。年十二にして兄頼家の跡を襲ぎて、征夷大將軍の職に上りぬ。性質溫雅聰慧、幼にして學を好みたり。其の著『金槐集』は自詠七百首を集錄したるものなり。此の人の歌風は、おのづから一體を爲して、啻に當時の詞壇に比類を見ざるのみならず、殆ど『古今集』の姿情をも離れて、夐に『萬葉集』に接する趣あり。高潔雄壯の趣致眞に誦すべし。惜しいかな、天此の偉人に福せず、建保七年正月廿七日姪公曉のために暗殺せられて、其の金聲玉音忽然として輟み、詞壇は永く軟弱纖巧を以て和歌の極宗となすに至れり。

大神宮に奉りし夏歌中に　　太上天皇

はとゝぎす　雲居のよそに　すぎぬなり　はれぬ思ひの　さみだれの空

千五百番歌合の歌　　源通具

たが袖ふれじ　匂ひぞと　春やむかしの　月にとはゝや

分別功德品或住不退地の心を　　大僧正慈圓

わしの山　けふきくのりの　道ならで　返らぬやどに　行く人ぞなき

題しらず　　西行法師

津のくにの　なにはの春は　夢なれや　葦のかれ葉に　風わたるなり

心なき　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ澤の　秋のゆふぐれ

かぎりあれば　衣ばかりを　ぬぎかへて　心は花を　したふなりけり

百首歌奉りし時　　藤原定家

駒とめて　袖うちはらふ　かげもなし　佐野のわたりの　雪の夕暮

秋の歌　　同人

あけば又　秋のながばも　すぎぬべし　空ゆく月の　をしきのみかは

詩を歌に合せ侍りしに、山路秋行といへる心を　　同人

みやこにも　今やころもを　うつの山　ゆふしもはらふ　つたの下道

和歌所にて六百首歌奉りしに冬月　藤原家隆

ながめつゝ　いくたび袖に　くもるらむ　時雨にふくる　ありあけの空

詩に合はせし歌の中に、山路秋行といへることを　同　人

あきかぜの　袖に吹きまく　峰の雲を　つばさにかけて　雁もなくなり

百首歌よみける中に　同　人

きのふだに　とはむと思ひし　津の國の　いくたの森に　秋は來にけり

太上天皇御書下影時歌　源實朝

山はさけ　海はあせなむ　世なりとも　きみにふた心　われあらめやも

霰　同　人

ものゝふの　矢なみつくろふ　小手の上に　霰たばしる　なすの篠原

古郷春月といふ事をよめる　同　人

たれすみて　たれながむらむ　ふるさとの　芳野のみやの　春の夜の月

題しらず　式子内親王

はなすゝき　また露深し　はにいでゝ　ながめじと思ふ　秋のさかりを

春立つ心をよみ侍りける　藤原爲家

あら玉の　年はひと夜の　へだてにて　げふより春の　立つかすみかな

擣衣幽　藤原爲氏

里とはみ　夜半の寢ざめの　秋風に　それかあらぬか　ころもうつなり

院百首歌の中に　藤原爲相

風すさぶ　かきねの草の　下葉まで　おつればつゆを　したふ月かげ

百首歌奉りし中に、夜旅　藤原爲兼

とまるべき　やどをば月に　あくがれて　あすの道ゆく　夜半のたび人

暮春月　藤原爲世

なかぞらに　かすみて殘る　かげもなし　くるゝ彌生の　ありあけの月

四季(今樣)　慈鎮和尚

春の彌生の　あけぼのに　四方の山邊を　見渡せば

花ざかりかも　白雲の　かゝらぬくまぞ　なかりける

花たちばなも　匂ふなり　軒のあやめも　かをるなり

夕暮さまの　五月雨に
秋のはじめに　なりぬれば
わがよふけゆく　月かげの
冬の夜さむの　あさぼらけ
心のあとは　つかねども

やまはとぎす　名のりして」
今年もなかばは　過ぎにけり
かたむく見るこそ　あはれなれ」
ちぎりし山路は　ゆきふかし
おもひやるこそ　あはれなれ」

第參章　散文

第壹節　總說

鎌倉時代の散文は、平安時代のに比すれば、顯著なる發達を爲したり。單に其の種類のみに就きていふも、既に前期に見えたるものは勿論、記錄・戰記文・註疏の類また新に本期に入りてあらはれたり。而して、是等の通有せる感想に至りては、

殊に平安期に於いて見るべからざりしものあり。佛教思想若しくは厭世的觀念の、一大思潮となりて普く此の時代の散文界に流通せること是れなり。蓋し、是等の感想は、世人が一般に懷抱せしもの、發して散文の上に現はれたるなり。當代の武人が生命とせし武士道又は漢學思想の如き、はた孰れも此に見るを得べし。夫の同時代にてありながら、散文は平安朝のと異なるところ多く、歌謳は依然前時代の風ありしも、一は主として不自然なる題詠をつとめ、一は專ら人事の直寫をつとめたるに歸せずばあらず。實に、本期の散文界に馳騁せし者は、多く僧侶隱士の輩にして、其の主題とせしものは亂離なる當時の社會にてありしなり。散文に於ける行文の進歩に至りては、特に注意すべきものあり。他無し、漢語若しくは梵語の殊に能く國語と調和せられたる、是れな

り。是に至りて、我が國語の優美閑雅なると外國語の森嚴莊重なると、長短相補ひ得、以て詞人をして其の筆を自在ならしめたり。

本期の散文を類別して、物語(附消息文)・隨筆・戰記文(附雜史)・日記及び紀行の四項とす。此の外、序跋・記錄・註疏等の文ありと雖も、文學上の價値あるものにあらず。

第貳節　物語

平安時代にありて繁盛を極めたる小說的物語は、其の時代の末葉より漸く衰運に向ひたりしが、鎌倉時代に入りてはわづかに一縷の命脈を詞壇の一隅に維持せしのみ。即ち『鳴門中將物語』『秋夜長物語』『義經記』『曾我物語』等の存在是れなり。是等は孰れも著者を詳かにせず、述作の年代また不明

なり。

『鳴門中將物語』と『秋夜長物語』とは、殊に結構單簡なるが、其の文其の想共に前期の物語の模倣に過ぎず。『義經記』及び『曾我物語』の二書は、之と趣を異にして、稍他類なる戰記文に類せり。『義經記』は源義朝の都落に筆を起して、義經の一代を叙述し、『曾我物語』は河津三郎の遺子曾我十郎・五郎の二人が仇敵工藤祐經を討果したる顚末を記せり。共に其の材料を史上の事蹟に採りたるもの、從來の諸作が單に想像を以て其の全部を構成したるに比すれば、當に一轉歩と云ふべし。『義經記』の文章は、『曾我物語』のよりも稍古雅の風あり。

此の外、また本期の始に專ら上流の間に行はれし繪卷物といふものあり。其の詞書は古物語の一變せしものなるべし

といふ。今傳はれるものに、『小柴垣草子』『地獄草子』の類あり。是等は後世の草双子の起源をなしゝものなれども、此の頃は繪畫を主として、其の趣向は甚だ簡單に、文章はた零碎なるものなれば、未だ一種の文學として論ずべきものにあらず。

消息文は、物語の見えたること然らざることを問はず、概しては次第に文學的趣味を減少せり。然れども、なほ當時に於ける感想・文致の一大變革は、こゝにも多少の痕跡を認むべし。漢文の消息は、平安時代に於いて既に國語の脈を混交して、稍不醇の文格を成せゝが、本期に入りては、日記・記錄の文躰が破格の漢文となりしに似て、普通の消息文も全く異樣なる擬漢文躰又は和漢混交躰となりぬ。其の一斑を示す爲に、左に、僧玄惠の『庭訓往來』より一節を抄出す。

春始御悅、向貴方、先祝申候畢。富貴萬福、猶以幸甚々々。抑歲初朝拜者、以朔日元王之次、急可申之處、被駈催人々子日遊之間、乍思延引、似谷鶯忘櫻花、苑小蝶遊日影、頗背本意候畢。將又樣弓雀小弓勝負笠懸小串之會、草鹿圓物遊三々九手夾八的等曲節、近日打續經營之、尋常射手馳挽達者少々有御誘引、思食立給者、本望也。心事雖多、爲期參會之次、委不能腐毫、恐々謹言。

おもふに、後世の日用文即ち所謂候文は、是等の文體に胚胎せるものならむ。當時の消息文例を集めたるものには、前記『庭訓往來』の外に、藤原良經の『新十二月往來』、玄惠の『遊學往來』、僧師錬(虎關)の『異制庭訓往來』等あり。

九月十三夜名ある月に一万宮王庭にいでゝ父の事をなげきし事(『曾我物語』)

そも〳〵、伊豆の國赤澤山のふもとにて、工藤左衛門尉祐經にうたれし河津の三郎が子二人あり。兄をば一万といひて五つになり、弟を箱王といひて三つにぞなりにける。父におくれてのち、いづれもやう〳〵成人するは

どに、父が事をわすれずして、なげきけるこそむざんなれ。人のかたれば兄もしり、兄がかたれば弟もしり、戀しさのみにあけくれて、つもるは月日ばかりなり。心のつくにしたがひて、いよ〳〵忘るゝひまもなし。我らはたちになり、父をうちけん左衛門尉とやらんをうちとりて、母の御心をもなぐさめ、父の孝養にも報せんと、いそがはしきは月日なり。數ならぬ身にも日かずのつもればにや、うき事どもにながらへきて、一万九つ、箱王七つにぞなりにける。折ふし九月十三夜のまことに名ある月ながら、くまなきかげに、兄弟庭にいでゝあそびけるが、五つつれたるかりがねの西にとびけるを一万が見て、あれ御覽せよや箱王どの。くもねの雁のいづくをさしてとび、ゆくらん。一つらもはなれぬ中のうらやましさよ。弟きゝて、何かはさはどうらやむべき。我れらがともなふものどもも、あそべばともに打つれて、歸ればつれてかへるなり。兄きゝて、さにはあらず。いづれもおなじ鳥ならば、鴨をも鷲をもつれよかし。そらをとべども、おのれ〳〵がともばかりなる事ぞとよ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。わどのは弟、われは兄、母はまことの母なれども、曾我どのまことの父ならず、

こひしと思ふ其人のゆくへもかたきのわぎぞかし。箱王きゝて、親のかたきとやらんのくびの骨は、石金よりも堅きものかとへば、兄がきゝて、袖にておとゝが口をおさへ、かしましゝ、人や聞くらん。聲たかし、かくす事ぞといへば、箱王きゝて、射殺すともくひきるとも、かくしてかなふべき事かはなきぞとよ。それまでも忍ぶならひぞかし。心にのみ思ひて、うへにはものをならへとよ。能は稽古によるなるぞ。我らが父は弓の上手にて、しゝをもい給ひけるなるぞ。あはれ、父だにましまさば、馬をも鞍をも用意してたびなまし。さあらば犬おふもの、かさがけをも射習ひなん。我らよりをさなきものも世にあれば、馬にのり、ものの射るみるもうら山しとくぞきければ、箱王きゝて、父だにましまさば、みづからが弓の絃くひきりたる鼠の頭は射させ參らすべき物を、腹立ちやといへば、兄がきゝて、それよりも憎きものこそあれ。だれなるらん、みづからが乘りつる竹馬うちくひつる事か。其ことにてはなきぞ。父をうちけるものの憎さに、月日のおそきといへば、なちはずとても、弓矢とる身は弓射ぬ事や候べき。兄がきゝて打笑ひ、わどのさやうにいふとも、手なれずしていかゞあるべき。射て見よとて、竹の小弓

に、箙はすゝきなるさゝはぎの矢さしつがひ、兄障子をかなたこなたに射とはし、いつか我ら十五十三にあり、父のかたきにゆきあひ、かやうに心のまゝに射とはさん。箱王きゝて、さる事には候へども大事のかたき、弓にてはいかゞとおぼえたり。かやうに首を切らんとて、障子の紙をきり、たか〳〵とさしあげ、そばなる木太刀をとりなほし、二つ三つにきつてすてゝたちたるまなてざし、人に變りてぞ見えける。

消息文（『定家御消息』）

毎月の御百首能々拜見せしめ候ひぬ。凡此度の御歌まことに有難う見申候へば年來をろかなる心に添き仰のいなみがたさばかりをかへりみ候とて僅に先人申をき候し庭訓のかたはしを申候き。定めて後世の笑はれ草もしげりぞ候らむなれども（中略）左道の事ども、しるし付候。相構て不可及外見候。大體恐老が年來の修理の道たゞこの條々の外はまたく他の用意なく候。隨分心底を殘さず書つけ侍り。必ずこの道の眼目と覺召て御覽せられ候べく候。おなかしこ〳〵。

第參節　隨筆

平安時代に『枕草子』ありて以來、隨筆として目せらるべきもの久しく跡を絶ちたりき。本期に入りても、只わづかに『方丈記』一部あるに過ぎず。其の他、『發心集』『撰集抄』『沙石集』の如きは、多少の類似を以て便宜上こゝに掲ぐるのみ。

『方丈記』の著者鴨長明（一一八一―一八七六）は俗稱を菊太夫といひ、山城國愛宕郡加茂の社の祠官の子なりき。幼時は父方の祖母の家に養はれて宮中に奉仕し、應保元年從五位下に叙せられしが、源平の亂に遭ひて官を止め、加茂の社に仕へて氏人となれり。其の後、建仁元年後鳥羽上皇和歌所を宮中に設けらるゝに及びて、長明其の寄人の職に補せられしが、幾程もなく隱遁して名を蓮胤と改めたり。平素藏するところのもの、佛像の外唯歌集等三五の書冊と琴琵琶各一

張とのみ。著作には、『方丈記』の外に、『四季物語』『發心集』『無名抄』ありて、皆後世に著る。『瑩玉集』『文字鑰』また長明の撰する所たり。建保四年六月八日、齢六十三にて歿せり。

『方丈記』は、建暦三年三月外山の草庵にて誌せる書なり。其の發端に流水泡沫の比喩を以て諸行無常の理を說き、進みて安元の大火・治承の颶風・養和の饑饉・元暦の地震等、其の見聞せる事實を掲げ、終に著者が厭世觀を叙ぶ。其の章句を修飾するところ、行文稍繁冗に失する嫌ありと雖も、尙ほ熱涙の筆端に迸出する趣あり。其の章句の佛書若しくは漢唐の文に典據すること多きは、猶ほ其の所說の彼等に據るところ多きが如し。

『發心集』は、僧侶の發心得道せる因緣由來を記載せるものなり。全篇に亘れる感想は毫も『方丈記』と異なることなし。

其の文辭の眞率なるは、或は復に『方丈記』に優るべし。

『發心集』と類を同じうせるを西行法師の『撰集抄』とす。無住法師は梶原景時の姪なりといへれど、其の實名及び閲歷等詳かならず。

人生の無常（『方丈記』）

行く川のながれは絶えずして、而ももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中に在る人と住家と又かくの如し。玉敷の都のうちに棟を並べ甍を爭へる、高き賤しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人も之におなじ。處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見しは二三十人が中にわづかに一人二人なり。朝に死に夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方よりきたりてい